浪花節三傑集

吉田奈良丸
東家樂遊
桃中軒雲右衛門

274
334

始

特100
148

浪花節三傑集

目次

殿中の刃傷……吉田奈良丸……一
赤垣源蔵……同……一
神崎與五郎……同……六
間重次郎……同……一六
大高源吾……同……二二
大石内蔵助……同……三〇

大正
2.8.8
寄贈

南部坂雪の別れ……同……三二
天野屋利兵衛……同……三七
討入り……同……四五
曾我兄弟卷狩門出……同……四七
義經安宅落……同……五〇
村上喜劍……桃中軒雲右衛門……五二
大石東下り……同……五五
神崎東下り……同……五六
粟田口霑笛竹……東家樂遊……五八

生首正太郎……同……六一
牡丹燈籠……同……六四
小松嵐……同……六五
塩原孝子傳愛馬の別……同……六八
大石東下り……同……七二
海賊房次郎……同……七五
忠僕直助……同……七九
觀音丹次……同……八二
水戸黄門……同……一二二

梁川庄八……同……一六五

目次終

浪花節三傑集

浪花節研究會編

吉田奈良丸

◉殿中の刃傷

フシ（頃は元祿十四年、旬は彌生の中の頃、七重八重咲く九重の花の都の空よりも、勅使が幕府へ御到着、扨も其日の賄役、内匠頭は長矩公、師匠番たる上野に、賄賂袖金なかりし爲め、彼や是やの手違を、受けて蒙る身の恥辱、性來短慮の長矩公、己れヤ

レとは心は矢猛にはやれども、御殿で刄を抜たなら、家は斷絶身は切腹、捨つる我身はいとはねど、殘る家中が不憫ぞと、堪へ堪へた十四日、所も有うに松の廊下の入口で、犬侍ぢやの人非人祿盗人と罵しられ、モウ是れ迄と勘忍袋の緒が切れて）

詞「前半に手挿んだ小サ刀に手がかゝり」

長「上野、待てつッ。」と

フシ（大喝一聲拔き放ち、ヤット、切り込む太刀先も、額の金輪が邪魔になり、無念や本懷遂げられず、田村屋敷に預けられ、春の夕暮告げ渡る、鐘の響と諸共に、無念の最後遊すばかり、家來四十と七人が、怨も積る雪の夜に、主の仇討譽は、高輪泉岳寺。

◉赤垣源藏（上）

フシ（空は師走の十四日、卍巴の有樣に、降り來る雪の其中を身に赤合羽饅頭笠、酒の機嫌の千鳥足、顏も赤垣源藏が、ブラブラ歸へる脇坂の、御屋敷門前となりぬれば。）

源「エーイ、御門番久し振りで御座るの。」

門『何誰かと思へば源藏殿では御座りませんか。』

源『如何にも、何誰かと思はいでも源藏で御座る、久々で御兄様の屋敷へ罷り通るが、御差支は御座らんかの。』

門『御通り下され、だが源藏様御見受け申せば赤合羽饅頭笠、殿様の御門なれば笠だけ取つて御這入に預り度い。』

源『イヤ〳〵其位な事を辨へのない源藏ではないが、右と左には兄への土産、甚だ恐れ入るが御門番一寸笠を御取下さらぬか。』

と頤を突き出す

門『御貴殿勝手にお取りなさい』

源『ハ、、、、、イヤ〳〵其位の勢がなくては門番は出來ぬ、ヨイヨイ、然らば自から取つて行くぞよ』と、

フシ(左に提げた竹の皮包み、門の地幅に、ヤワリ置き、手を差上げて饅頭笠。)

(ボリツと切つて大空へピユーン。)

源『御門番之で御勘辨下さるか』

門『まだ笠の枕が頭に在樣で御座る』

源『枕があれば晩に寢る時の世話は入らずに濟む、アー降るは降るは』

フシ（雪は鵝毛に似て飛で散亂す、人は鶴裳を着ると雖、源藏は赤合羽饅頭笠で小言を言はる。）

源『然らば御免』と、

フシ（ヒヨロ〳〵御門内にと這入り行く、德利の別れの哀れさが如何なるのか次の段。）

◎赤垣源藏（下）

フシ（絲のほつれや笠の臺、頭に載く君が恩、忘れぬ程の武夫とは、義理の足元降り埋む、雪踏〆て赤垣が、醉ふた機嫌でとつお

いつ、鹽山屋敷に歸る途。）

詩吟『北向再拜スレバ天日昏シ。七タビ人間ト生レ此賊ヲ滅サン

フシ『建武の昔五月雨の、空ほの暗き東雲に、スハヤ寄せ來る賊軍へ、正義の刄振舞つ、死して護國の神となり、生きては興國忠良の、臣と呼ばれて後の世に、名も橘や香ばしく、誘ふ嵐の烈しさに、枝は枯れても根は殘る、武士は國家の柱ぞと、今も名高く菊水の、嗚呼忠臣は湊川、楠父子も鑑みなれ、君に仕ふる武夫の、忠義に上下の隔ない、今宵に迫る討入の、せめては兄へ今生の別れ、持て戻つた酒肴、鹽山一間に通られて、不在の事故兄上

の、着物に酒を手向られ、兄と別れが徳利の話、如何になるか二度の御縁の讀物なり。)

◉神崎與五郎(一)　吉田奈良丸

フシ(花の都の片邊り、月の入るてう山科を、跡に眺めて神崎が神の由縁の四の宮へ、心を込めて行先は、恨重なる吉良上野に、少しも早く逢坂と、名のみ殘れる關の戸の、宮路も瀬田の長橋や深き思ひは琵琶の海、横に眺めて草津に宿る朝の露、露の命と覺悟して、逢は夢路か夢の間に、着た所は東海道、道の難所は箱根

山、甘酒茶屋にとなりぬれば。)

與『婆さん免せよ。』

婆『コリヤマア旦那様、茅屋をも御厭ひなく、よう御出下さいました、其所は端近か何卒此所へ御這入り下ださいまするやう。』

與『オ、イヤ〳〵却つて中に這入るより、表の床几を借り受けて四方の風景を見て一杯頂戴して、日の在る間に小田原迄下り度存ずる故に早く酒肴をもて。』

フシ(心得ましたと茶屋の老婆が持出す、猫足膳を前に置き相手なければ獨酌で、顔にホンノリ櫻色、ちらつく目元で四方の風景

を見渡せば、遙の方に眞帆片帆、天の小舟の此所彼所、三保の松原清見寺、暫し眺めて居る内に。)

◉神崎與五郎（二）

フシ（武士の、大和心を其儘に、姿に見する富士ケ峰、積りし雪は千早振、神の御代より解けし試のあらぬかと、思ひ浮べて皇の、御稜威の程こそ尊けれ、仰ぎ見た神崎は。）

與『婆さんや。』

婆『ハイ旦那様。』

與『この富士を見て誰が歌でも詠まれた人があるかな。』

婆『ハイ了度昨日で御座りましたが、西國の旦那様が御休みなさいまして「唯見れば、扇廣げて倒に、要は解けぬ富士の白雪」と詠れまして御座りますする。』

與『なに要は解けぬと申したか。』

婆『ハイ。』

與『ウム。「未だ解けぬ恨は富士の山よりも」

婆『エヽ。』

與『イヤ何でもない。ハヽヽヽヽ、何時かは解けるむねの白雪。）

フシ（雪を雪と云ひ始めたは、會稽山の勾王が、雪ぐ恥辱の雪ぢやげな、思ひ直して見返れば、行手の方は雪の小田原湯本の宿、座頭轉ばし七曲り、百足に似たる百本杉の彼方より、登り來ました馬方は、年の頃なら三十五六、身體一面草紙の如く、馬の打綱を肩に掛、登り來ました馬方が、茶屋の表に歩を停め。）

馬方『お婆ア御免ねーよ。』

婆『アラ丑さんぢやないか、此間から一寸も見えなかつたで、何處か惡くないだらうかと、大變心配して居たよ。』

丑『有難てーなお婆、叩き殺しても死なね！やうな身體だが、儘ならぬーのは賽の目だ、丁と張つたら半がでる、半と張つたら丁がでる。』

◉神崎與五郎（三）

フシ（御茶屋の表に差し掛つたる馬方が、馬の打綱を松ヶ枝に、束り付たる其儘で。）

馬方『御婆久し振りだな。』

婆『まあ丑さん、お前ちつとも見えなかつたね。』

丑『お婆暫くだつた、金がありやア直に拂て上るんだが、錢が無

いんだから濟まねーが、一寸一杯貸して呉んな。』

婆『夫ぢやア丑さんお前金さへありやア拂ひ際のいゝ男だから、サア御飲んなさい。』

持て來ました一杯の酒をグーッと飲み干た、微醉機嫌で横合を見ると、神崎與五郎が控へて居る。)

フシ(前にヒタ〳〵つと、近寄りまして揉手に中腰、目付の惡い丑五郎が與五郎を睨み付。)

丑『旦那御見受申しや御急ぎの樣、小田原迄の歸り馬、一丁場御乘りなすつて御呉んなせー。』

與『折角だが未だ足も疲れては居らず至つて某は馬に乘る事が嫌ひだから斷りを致す。』

丑『ナニ馬が嫌だー、よしやアがれ此のトンチキ奴、町人や百姓なら、馬が嫌だと云や受取か知れねーが一本半本の人切庖丁差した武士が、馬が嫌ひと吐しやー受取れねー、サア覺悟しやアがれ、』と、

フシ(側に近寄り神崎に、在にあられぬ無禮を致す故、一徹短慮の與五郎なら、刀の束に手を掛けて。)

眞二ッに致さうかとは思ひましたが、いや〳〵さうぢやない。

フシ（大事を抱へた身の上なり、斯んな者でも切り殺せば、取りも直さず罪人と、大事の前の小事故、胸を押へた神崎が、誤り證文に五兩の金を付て、詫を致せば、弱身に付込む丑五郎が。）

丑『ザマー見やがれ畜生、行先を氣を付けて行け、お婆歸りに勸定して上げるぞえ、ジャーぽつ〳〵行う。』

と束た打綱を解いて。

◉神崎與五郎（四）

フシ（馬の打綱をパッと掛け、肩で風きるたんか切る。）

追分（箱根八里は馬でも越すがよー、ハーイハイー。）

シャンコ〳〵。

フシ（でー下り行く、後ろ姿を見送ッた、神崎與五郎は、芙蓉の姿泰然と、心奥山吹荒ぶ、風が持て來る青龍權現の瀧の音、逆卷波押靜め江戸へ下つて幾多の苦勞の甲斐やあり、本懷遂し功績の此評判が津々浦々に鳴り渡り、噂に年も早越えて、元祿二八の年の春、鳥が啼くてう東路の、花の御江戸を跡に見て、筑後柳川御家來の、赤松清左衛門が國へ歸りのつれ〴〵に。）

宿りし夜半のつれ〴〵に、御本陣に泊て人を集めて義士の功績

を語る、今の宿の勢古六太夫の方で。

フシ（神崎與五郎が忠義の仇討したと聞いて、馬喰の丑五郎が、此んな忠義な旦那なら、あんな無禮をするのぢや無かつたもの、免して下さいと御詫して、丈と伸たる黒髪を、剃り卸して出家の姿となり、東へ下り神崎與五郎の御墓の守に餘念なし、夫れ人の性こそ善なる者か。）

◉間重次郎（上）

吉田奈良丸

フシ（世は德川の水清く、其源も澄渡り、三葉葵が此所彼所、繁る常磐の松平、枝も鳴さぬ深緑、緑紅こき交て、錦と見ゆる武藏野の、千代田の奥に聳え立ち、萬代動がぬ城の名も、紅葉山の鶴舞城、朝日夕日に照り榮えし、花の御江戸は、八百八町有るが中にも鐵砲洲、此所は淺野の上屋敷、數寄を蒐めしお庭先、朝な夕なの御手入に、今日しも植木屋六藏が松の手入をして居る内に。）

如何なる途端で御座りましたか、足場が外れて松より下へガラガラドーンと落こちる、下に南京古渡りの鉢が有升て、松の盆栽が滅茶苦茶に成つちまふ、足輕共出て來まして、

足『やい六藏貴樣とんでもねえ事をした、殿樣へ何んと申譯を致す。』

六『何とも申譯が御座りませぬで、宜敷御詫を願ひたう存じます。』

足『憚乍大閤秀吉公が、朝鮮征伐の際に、朝鮮王城より分捕を致した古渡りの鉢だ、其鉢を破た日にや殿樣に申譯が無いぞよ。』と、

フシ（ガヤ〳〵申立て居る後ろの方より現はれたのが、御作事方の間重次郎光興、不憫と思ひ殿樣へ、命乞をば遊ばして、六藏命を助けた計り、淺野の御家が斷絶の後、植木屋六藏が命に替へ、間親子を助けるの、いとど憐れの緒が如何なるのか次の段。）

◉間重次郎（下）

フシ（植木屋の六藏は、思ひも寄らぬ粗忽をして、色青ざめて居る所へ現はれました間重次郎光興が。）

間『六藏其方は飛んでもない無禮を致した喃、併し、植木鉢と人命とは替へられないで、殿樣へお詫をして遣はすで暫時相待てよ。』

と、重次郎早速殿様へお目通りをいたしまして、

問『恐れながら、御前、只今、御大切の盆栽を取り片付んといたしまして、重次郎過つて、手を滑べらし石に當つて粉微塵に相成りまして御座ります、重次郎の粗忽、幾重にもお詫を申上げる儀で御座る。』

フシ（聞し召された長矩公は、大いにお怒りかと思ひの外、滿面に笑を含ませられて。）

長『重次郎……。』

問『ハ、ッ……。』

長『生者必滅じや喃、形ある物は何時かは破壞るゝの慣ひぢや、今日ばかりは忘れ遣はす、以後は必らず慎しんで宜からう。』

フシ（名將の下に弱卒なしとかや、かゝる名智な御主人の、家來にありし間なら、一身を犧牲に供し、願ひ出たが漸くに、お聞濟にと相成まして、下り來まして植木屋に、此儀話せば六藏も、喜び勇んで輕子橋、後に眺めて立歸り、此大恩を忘れずに、朝な夕なに淺野家の武運長久を祈りました甲斐もなく、時世習の世の中の、花一時の眺めかや、殿が殿中で刄傷致し、お家斷絶した後は植木屋六藏の宅へ、女房伜を預けて置いて國の赤穗に馳せ付る。）

⑤大高源吾（上）

吉田奈良丸

フシ（世の中を、何にたとへん飛鳥川、昨日は人の身の上も、今日は我が身に降りかゝる、苦樂不定の慣ひとて、風雅の道に名を得たる、大高源吾忠雄も、去年の彌生の小夜嵐、花と散りにし我が君の、怨は積る苔の下、やわか討たいで置くべきと、江戸へ下つて淺草で、賤が伏家の佗住家、されども誓つた武夫の、石より堅き眞心は、時節を待つて殿樣の、仇を返すを樂しみに、春過ぎ夏行き秋も暮れ、木々の梢も冬枯て、見るも哀や昨日今日、晴れ

たる空も搔き曇、卍の如く降り來る雪を古の花と眺めん窓の内、雪は凍りて靜なる、枕に落つる鐘の聲、諸行無常の響あり、一夜明くれば白妙の。）

尙も歇まずに降りしきる、其雪の中、破れた、どんさに眞の出た丸ぐけ帶を〆めつゝ。

フシ（素足に草鞋を履き〆まして竹の束をば荷ぎ上げ、淺草後に本所の松坂町は吉良の屋敷の方角へ、笹よ笹よと急がれる、兩國橋で寶井其角と對面が如何なるのか次の段。）

◉大高源吾（中）

フシ（富士と筑波の山間を、流も清き隅田川、下は品川大海の、沖で鷗と云ひつれど、此處へ飛び來りや鳥の名も、粹に變りて都鳥、往き來ふ船の苫さへも、白く見えたる艶麗さ、橋の中央に佇んだ、大高源吾の笹賣が、あたりの景色を打眺め。）

心の内に思ふやう、噫世が世であれば殿様と、數寄を集めしお
かこひにて、友と睦みて松風の音聞きながら見し雪も、今日は
草鞋に踏みしだく、斯る姿に相成るも、皆上野のなせしわざ。

フシ（いよ〳〵明日は討入いたし、第一番に上野の首級を上げりや、死出の旅路は味方一同と手に手を取り、蓮の臺にましませる殿の目通りしたならば、此に勝た愉快なし、氣を取り直して居る折から、上野の東叡山の七ッの鐘が告げ渡る。）

詩吟『空山雪落ツ一聲ノ鐘　花落チ花開キ萬々壽』

フシ（暫し眺めて居る折柄、歸り來つた一人の宗匠、此が茅場町の寶井其角、兩國橋の對面が如何なるのか次の段。）

◉大高源吾（下）

フシ(橋の中央に大高は、佇み居らるゝ向ふから、五十九けんの大黒傘、上州紬の長合羽三寸ほうばの高足駄、雪踏み〳〵て歸り來る、茅場町なる寶井其角、出逢ひ頭に。)

其『オヤ其處へ御出遊ばしたのは子葉殿では御座らぬかな。』

云はれて大高は惡い處で其角に逢ふた、まさか違ふと云ふて行き過ぎる譯にも參らねば、

源『オーオヤ何誰かと思へば宗匠殿、相變らず御壯健で御目出度御座りまする。』

其『アー源吾殿にも相變らずとは申上度いが、變つた姿にお成遊

ばしました、』花も實も斯なるものか冬木立』

源吾もだまつて別れる譯には參りませんで、

源『鐘も凍れる別路の雪。』

其『ハツ、矢張り風雅な道はお忘れぢやあないと見えましたな。』

源『好きの道こそ詮なけれ、つんざく樣な風の中、あたりの風景に見とれて居りましたわい。』

其『然らば源吾殿御免被下よ。』と、腰の矢立を拔きはなし、懷紙を出してスラ〳〵と書ておつけを願ふと差出す。

源『有難う御座る。』

と大高は手に受取りて眺むれば、『年の瀬や水の流と人の身は』と記して御座ります。

源『有難う御座る。』

と筆を借りスラ〳〵と書て、

源『其角殿御笑ひ下され。』

と、わき句を付て渡したから、取り上て能く〳〵見れば、

フシ(「あしたまたるゝ寶船、」ちらゝ眺めた其角殿。)

其『アー源吾殿、何時でも御出下され、行く先き〳〵の大名旗本衆で、あなたの噂ばかり、三百石や五百石なら、キット御周旋を致しませう。』

と云はれた時に源吾が、ハ、ア、其角は私の心が判らんわい、明日に成たら吉良の屋敷に討入します、首尾よく本懐遂げたなら、蓮の臺に乘れますと云はんばかりに渡したが、二度の主人を持て寶の船に乘りたいとお取なすたに違ひがない。

フシ(知らねば此方の幸ひだ、さらば〳〵で別れたる、大高此夜のお話しが如何なるのか暫く休憩。)

◉大石山科歸り(上)　吉田奈良丸

フシ（敵を欺くそが爲めに、京の島原かたばめや、藝者末者を右左、酒地肉林の樂も、熱鉛を呑むにイヤ勝る、辛らき思ひの内藏之助、今日しも島原跡に見て、山科指して歸る道、都の空の春景色、霞棚引く東山、祇園清水長樂寺、浮世の外の華頂山、夜る咲く花は圓山に、行くも歸るも花と花、咲くも花なら散るも花、散て果敢なき夢の跡、浮身を扮す苦しさを、誰に語らん語る可き人も無ければ吾れと我、猶も狂て狂亂の、浮き面白く千鳥足、ヨーロ〳〵として、）

詩吟『田狐ヲ逐ントシテ虎ヲ原野ニ放ツ、此殘骸其身亡ビズ。』

フシ（さても三條の橋の上、未だ寒からぬ春風を、ソヨソヨ受けて佇の。）

◉大石山科歸り（下）

フシ（嗚呼行く水は鴨川の、眞砂の數は盡きる共、盡きて盡せぬ武夫の、恨は積る苔の下、ヤワカ討たいで置く可きと、思はず掛けた刀の柄、邊りに人目もある故に知られて大事と、又取直し、以前に復る內藏助、三條の橋を、渡り詰めたは妹の別れの後朝に又も粟田の森蔭に、ホーホケキョーと鶯の、ウララ〳〵と永き

日を、日の丘峠も束の間に、心山科浪宅の、己が御宅に立歸り、大恩受けた母親に、可愛妻子の二人をば但馬の國に追出し、東下りの用意とて、味方一同の心を試す其の爲めに、僞連判を認めて親子二人の血判消て、山科表の味方一同に廻してみたが、心變りの人も無い、ヤレ幸と頃も元祿十五年の旬は菊月半ば頃、山科跡に大石が、東下りや最後の評定、兩國橋で勢揃ひ、四十七士が月雪の、中や命の捨處、吉良の屋敷の討入が如何なるのか御預り。)

◉南部坂雪の別れ（上）　吉田奈良丸

フシ（鳥が啼く、東の空も人の身も、雪には最ど曇り勝ち、涙の雨に片假名の、夜を込めて降る白妙に、花のお江戸のいろかさへ皆一樣の銀世界、此處は赤坂南部坂、然も天下の旗本三千石、淺野式部の大輔の御屍敷内、女ばかりの假御殿、過し榮華の夢の跡日影を忍ぶ身とはなり、今日は極月十四日、月は變れど殿樣の御命日。）

佛壇の正面には冷光院殿の御位牌、前には百味の御食、唐木の經机、あたりまばゆき金襴の打敷には金銀の香爐に、

フシ　薗麝の香馥郁として八方に滿ち、立て連らねたる金唐紙は

天人羽衣の翻へしたるを畫き、彌陀の淨土も斯くやとばかり思はる丶、佛壇前に控へられたは御臺樣、雨の朝の女郎花、風に揉る丶風情あり、亡き殿樣への御回向を唱へ居らる丶折も折り、玄關にか丶る內藏助、御目通を願ふので、南部坂雪の別れの哀れさは暫く休憩仕まつる。)

◉南都坂雪の別れ（下）

フシ（佛間の唐紙を、右と左に、開いて兩手をつかへた一人の女中。）

女『恐れながら御臺樣、只今、內藏助が御目通を願ひ居りまするが如何計らひませう。』と、

フシ（聞こし召された奧方の、其悅は如何ばかり、御家斷絕した後は、もう今日にも內藏助が見ゆるか明日にも無事な御顏がと幾夜寢覺の現にも忘る丶暇ぞなかりける、斯の賴み切たる內藏殿が今目通りと聞く上からは、八千代の椿うどんげの、花を咲かして見る心地。）

奧『佛間の對面も不都合今改めて逢ひませう程に、早う案內をして鈴ふや。』

と、御居間を改め待ち受ける。

こちらは女中玄關に來たり、内藏助に此由を申し入れる、

フシ（供人は玄關方に待して置て内藏助、案内につれて靜々と、入り來る姿のしとやかに、鵜の目返しや鷹の羽の、目に立つ人目は忍びやか、殿拜領の小刀前はなやかにたばさみ、案内につれていくへの疊も七足半、小縁〳〵も踏まぬやう歩く姿は小笠原、流義をさだめて、只ッ、〳〵〳〵と入り來り、間の唐紙右左に、開けて兩手を支へて奥方を見上げまつれば、古に替る御有様、流石豪氣な太石も胸に滿ち來る後や前、見下し玉ふ奥方も胸に迫つて

過越方や行末が如何なるのか明晩の。）

◉天野屋利兵衞（上）　吉田奈良丸

フシ（花は三吉野、人は武士、野武士、山伏、浪花節、藁にも節のあるものぞ、其藁を食む駿足の、馬は厩に、鎧は櫃に、祖先の傳來、お家の寶、有銘無銘の業物は、鞘に納めて元祿の、世の文明は、文弱の、詩歌管絃や俳諧の、道に浮身をやつしつゝ、昨日も今日も明日もよと、上の好みになれ習ふ下町人に至る迄、嗜まぬ者ぞなかりける、腰に手挾む秋水の刄に曇りがあればとて、圓

角四面の上下で、心の裡の曲りたる、犬侍の多き世に、身は町人でありながら、人に斯うよと頼まれりや後へは退かぬ義侠の、雨夜の星の天野屋利兵衛、しかも淺野のお邸と、國の赤穗の御用して、三代相恩を蒙りました、其のお家が、元祿十と四年、三月中の四日に斷絶して、殿は御無念の御最期なさる、城代大石内藏助が、夜討の道具を天野屋に命に替へて頼むぞと、言ふた言葉を呑み込んだ。)

◉天野屋利兵衛（中）

フシ（海より深き、須彌山の、山より高き大恩の、萬分の一を返さんと。）

大石内藏助より利兵衛頼むと言はれた言葉をグッと呑込んだ天野屋、大阪を始め京名古屋、或は播州備前、大和路迄、手を延ばして拵へました夜討道具は二十四品、チャンと出來たを白長持に收め、錠前をピチンと卸しまして、封印付て大石に尋ねまするとと何卒船で江戸表迄送り届けて貰ひたいとありましたから、

フシ（堺の浦から船に積んで熊野沖から遠江灘を、江戸へ廻せば

品川で、堀部安兵衛と、中村勘助、鍔屋宗伴の三名が、之を受取りまして下谷池の端に持歸り、倉の中に收めましたから、釋迦も提婆も御存知はない。)

之れで利兵衛も喜んだ、モウ近日にや愈々内藏助様が東下りを遊ばすと御思召て居られた、丁度十一月中頃に表の方から乘込來ました一人の男、

フシ(ア、ー木綿の着物にや小倉の帶、どらりん置だ二ッ折、髷先左になびかして、堂島下駄に身を乘せた。)

天野屋の表までツカ〳〵と入り込んで來た。

男『ア、御免ネー天野屋の旦那に賴んで三百兩計り金が借りていからそう云つて呉れ。』

番頭小者が之を聞て、

番『コレ〳〵御控へなさい、憚りながら天野屋の旦那、お前のやうな者に三百兩と云ふ大枚の金貸すやうな因縁がない。』

男『ヤイ縁ない橋は渡らないんだい、借る覺えがあるから出て來たんだい、ナア内の旦那は謀反人に與みをして、誂へた兇器、ナニ、イヤサ。』

フシ(皆迄云ふては曲がない、默て三百兩出せばよし、嫌だとは

ざきや恐れながらと、名乗つて出たら氣の毒ながら天野屋の家は決所になるのだ。夫がいやなら金を出せ。)

◉天野屋利兵衛（下）

男『おらア京町堀の二丁目刀鍛冶の職人で長柄の勘八と云ふ男だい、茲の旦那が謀反の兇器を誂た事が俺ア確に承知して居るんだ、サー今に青いシャッ面かきやがれ。』と、

フシ（其儘奉行の御屋敷へ、恐れながら天野屋利兵衛は謀反人に與みしまして、天下法度の兇器を拵へましたと、訴へて出ましたから、御奉行様。）

ソレ天野屋を召捕れ、と

フシ（三十五人の天滿與力が天野屋をば、御用しばかり、捕方に向ひまして、利兵衛は尋常に縛を受け、死ぬる覺悟でお白洲へ引立てられりや御奉行は、其頃浪花の西町奉行、明と云はれた松野河内守様が。）

奉『天野屋其方京町堀の刀鍛冶藤原の清國に頼み斯る兇器を誂へた覺えがあるか如何に。』

フシ（云ふより早く天野屋の前に突出したのは、小田宮流の投松

明、打眺めたる天野屋は。）

利『今更陳じ立は仕りませぬ如何にも拵へた覺えが御座りまする。』

奉『ム、流石聞えも高き天野屋眞直に申す段は感心致した併し町人の其方よもや斯る兇器の入らう道理がない、誰かに頼まれて拵へたに違はない誰に頼まれたか、眞直に云へ。』

聞て天野屋は差うつむいて頼んだ人は有ますが、利兵衛男じや頼むぞと、云はれた言葉は反古には出來ぬ。

利『頼んだ人の名前丈は申上げられませぬ。』

フシ（奉行は之を聞より天野屋を、責苦にかける身は八ツ裂きにならうとも、内藏助様が、充分本懷遂げる迄は死んでも白狀は仕らず。）

◉討入

吉田奈良丸

フシ（武夫の八十氏川に波立ちて、君の御船は沈むとも、水よく船を浮べよと、古人の敎其儘に、赤穗浪士の人人が、赤き心や紅葉ばの日暮を急ぎ唐錦、よしや嵐に亂れても、譽は代々に龍田川川と山との合言葉、言葉に云ふ勇しく、猛りに猛る丈夫が、君

が爲めには何のその、岩をも通す桑の弓引かば返へさぬ習とて、一ト歳餘り九の月、恨を呑でめぐる日の、一日千秋の思ひして誓は固き鐵の、石にまかして義は重く、君の忠臣眞心は違はぬ人數内藏助が、山鹿流義の陣太鼓、忰主税の良金が、親の讓りの山鹿流眞切割の采配にて、各進めと指揮をして、長の年月松坂町やわか遁がさじ相生町、かど引廻はした裏と表の方よりも、二手に分れて討入致した、爰の治まりどうなりますか、暫く休憩次の段。)

◉曾我兄弟卷狩門出（上）　吉田奈良丸

フシ、蛟龍池中に在りと雖、此れ永久のもに非らず、時に於て雲を呼び、天邊高く身を寄する、例に漏れず賴朝公、恨を飲んで長月月、蛭が小島に潜みしも、只一場の夢と過ぎ、處も堅き石橋の、山より高き武名をば、津津浦々に轟かし、天下を治めて鎌倉に、あまた大名の軒並び、政治隈無く行届き、世は太平に治まれど、治に居て亂を忘れざる、弓矢取る身の習はしと、數萬の兵を從へて、頃も建久四つの年、旬は五月雨中ば過ぎ、三國一の名山

の富士の狩鞍御催し、繰出したる行列は、近年稀れなる有様と、如何なる人も驚きぬ、爰に名にし負ふ曾我中村の、曾我の太郎の養ひ子、河津三郎祐泰の忘れ形身の御兄弟、兄の十郎弟五郎の兩人が、父の敵の工藤左衛門祐經が、狩場の御供と聞くからは、何か猶豫を致すべき、弟續けと中村を後に眺めて、富士の狩場に急がるゝ。)

◉曾我兄弟卷狩門出(下)

フシ(十八年の其昔、安元二年神無月、四方の梢に紅の、茜は

させど夕時雨、木蔭小暗き九十九折、奥野の狩の歸るさに、赤澤山の麓にて、近江八幡の手に掛り、あへ無い最期遂られた亡父の敵き工藤左衛門祐經の、首を上げて御無念を、晴らさで置かぬ武士の道、弟續けと云はれたで、勇立つたる時致も、兄上いざや乍併も長年月、御恩を受けた假の親、曾我の太郎は祐信殿に、他所乍の、御暇乞をした上で、母上樣にも是れ今生の別をと、二人揃て母の滿江の前に參られて、此度頼朝公が富士の狩場を遊ばす由、戰場見習の其爲に、狩場の御供を仕まつると申上ぐれば、男勝りの母滿江、之が形見の品ぢやぞと、下し置かれた小袖をば

弟五郎が身に付けて、曾我中村を後に見て、急ぎや間も無く三國一の名山は富士の裾野と成りぬれば、アーラ山颪しに旗尻空に靡くは之れぞ頼朝公の陣處、此の手に續いたあまた大名ある中に、目指す敵の工藤の陣屋、恨を飲んで兄弟が、辿り來たのでサー治まりが如何になるか。)

◉義經安宅落

吉田奈良丸

フシ(旅の衣は篠懸の、露けき袖や絞るらん、實に鴻門の楯破れ都の外の旅衣、日もはるゞと越路の末、思ひ遣るさへ果敢なけ

れ、時しも文治三ッの年、頃は更衣月十日の夜、月の都を迷ひ出で、九郎の判官義經公、讒者の舌頭に惱められ、兄頼朝公とは不和となり、さて御供の人々には、龜井、片岡、伊勢、駿河、御厩喜三太、鷲尾の三郎や常陸坊、辨慶一人が、先達の、姿となりて山伏の未だ習はぬ旅姿、中に哀は卿の君、はや七月の身重にて履き慣れざらん草鞋履き、重荷に都を後に見て、落ち行く先きは何處ぞや、黄金花咲く陸奥國の、伊達郡は平泉、御館太郎秀衡の、館を指して急がるゝ、袖の篠懸露霜を、今日分け初めて何時までも、限りもいざや白雲の宮居久しき神垣や、松の常磐の木の芽山

杣山人の板取川、川瀬の水の淺瀬津や、末は三國の湊なる葦の篠原波寄せて、靡く嵐の烈しさは、花の安宅に差かゝり、富樫の左衛門成澄と、經の問答や山伏問答、辨慶早速の勸進帳が、如何なるのか次の段。）

◉村上喜劍（上）

桃中軒雲右衛門

フシ（粹も不粹も絹ぶるひ、ふるひ上げたる色里で、先祖の自慢は聞き苦しい。）

大『廓の酒は又別ぢや、貴君も一ッ召し上れ。』

喜『イ、ヤ飲まぬ、何を云ふても張合のない、薩摩の武士の鐵拳を喰つて見よ』と、

フシ（固めし拳で丁と打つ。）

大『これは亂暴。』

フシ（御手が痛みは致さぬか。）

喜『犬侍これを喰らへ。』と、

フシ（鉢に盛りある蛸肴、足に挿んでグット出す。）

大『これは何より大好物。』

フシ（手を出して足を戴く蛸肴）見るもけがれと、

フシ（喞みし啖を顔にはき疊を蹴つて村上が、出て行くあとに大石が、眞心表に現はれて、喜劍先生嬉しいが、明けて云はれぬ胸の中わかる時節もあるならん。）

◉村上喜劍（下）

フシ（卯月も去りて五月雨の、昨日も今日もかき曇り、降りみ降らずみ定めなき、頃は節句を翌日にした、五月四日の入相時、シャア〳〵と降る雨の中、笠も冠らず頭上から、ビッショリ濡れた濡れ鼠、山門這入る正面本堂、左手斜に上る冷光院殿墓前を過ぎ

グルリ廻れば四十七士の墓所、一際目立つ大石の、墓前に坐すは村上喜劍、四邊は森〳〵寂寞と、松も柏も生茂り、風さへ通さぬ泉岳寺の墓地、折々聞ゆる梟の聲、今打ち出す鉦の音は、ありや本堂の勤めの鉦。）

◉大石東下り

桃中軒雲右衛門

フシ（先づ山科を後に見て、關の東に向ひけり、時しも小春の道すがら未だ見馴ぬ山の色、聞くも馴れざる水の音とり〴〵樣々多き中、わけて近江の湖は波も渚になぎ渡り、霞も晴るゝ鏡山、

四方の姿や映るらむ、瀬多の長橋打渡り左手に見ゆるが三上山、そも滋賀の湖は、孝靈天皇の其昔富士の高根と諸共に、一夜に現出せしとかや、旅のつかれも皆人も老柞の杜の下草も、かれがれになる薄氷、越川越えて行く先は、多賀の御山も伏拜み、小野の宿より打つゝく、馬場醒ケ井柏原不破の關屋に荒れ殘る、疎の軒に漏る雨も笠着てぞ行く美濃國。)

◉神崎東下り

フシ(内藏に別れて神崎が、東路さして下る道、暫し休らう逢坂の、關のとざしも何時しかに、あけ行く雲に霞む山、都路遠く離れ來ぬ、身は氣散じの一人旅、變る名所が噺の友よ、間は夢路か夢の間に、着いた所が東海道一の難所が箱根山、こゝは見晴し小茶屋の表、眺望の好い將几に腰をかけ。)

神『婆よ茶を一ッくれよ。』茶を飲みながら則休が、

フシ(ふり仰向いて見てあれば、富士の高根の初深雪、色も光も清見潟、波よりぞ立つ秋の色、遙に見ゆるが清水の港、沖に突出致せしは、三保の松原青々と、なかにも目に立つ羽衣の松、近く見ゆるが沼津灣、帆かけて走るが丸屋舟、波間を漂ふ漁船の、は

桃中軒雲右衛門

いる處が田子の浦。)

◉粟田口霑笛竹　東家樂遊

フシ(粟田口が霑の笛竹、金森家の騷動を、記憶致せしを讀み奉る。)

詞(天保二年の正月の五日深川萬年町に住居する刀劍商岡本政七の番頭重三郎が、小僧の常吉を連れ芝の金森家の重役稻垣小左衛門と云ふお方の處へ年始に來たり、屠蘇の御馳走に成て日の暮方戻る其際に、當家にとつて重寶と傳へられたる粟田口國

綱の名刀、之を預りまして重三郎箱に入りしを淺黄の風呂敷にくるみ、大事な品ゆへ自ら之を負脊ひ、

フシ(小僧常吉連れまして金森家を後にして、心指するが深川の萬年町を指まして、出て來たのが永代を渡りますれば、佐賀町より河岸へ出でゝ仙臺河岸。)

詞(此處へ來頃は丁度其夜の五ツ頃、今迄は醉の廻らなかつた重三郎此處まで來ればもう萬年町の宅がすぐ其處だなと思へば氣が緩んだ物か、醉が出てバッタリと其處へ倒れて仕舞ふ、小僧常吉は驚いて、

小『番頭さん、そんな處へ坐わつちや困るからもうぢきだから早く歸つておくれよ。』

番『何と云つても駄目だよ、もう到底も動け無から貴樣お負て行け。』

小『そんな大きな者おぶつて行かれるもんか、ぢや御主人を呼で來るから待てゝおくれ。』と、

フシ（其儘小僧は駈出した、折柄此方に置てある、一挺の辻籠より、覆面頭巾の武士が現はれまして、重三郎が脊負居る粟田口の名刀を、奪ひ取ります一席は、此次の出演で又讀み奉る。）

◉生首正太郎

東家樂遊

フシ（時事新報掲載の拔き讀にて、探偵實話、生首正太郎、惡事增長の顚末を讀み奉る。）

詞（正太郎が淀川堤へ飛込で、八軒家の船着場まで逃げて來り三十石船の艫の方に、水の中に身體を浸し待ち受ける內に、日は西山に傾きましたで仕合せ好しと船の中へ這り込み、板子を上げて舶底に隱れて夜が更けたら逃げやうと待つて居ると、ドカ〳〵〳〵乘り込で來る船頭連中。）

甲『ヤイ、辰己いくら負けた。』
辰『おれ三兩べい負けた。』
甲『ヤー、どうだ吉。』
吉『己れか、己五兩べい負けた。』
甲『ヤー皆負けた者ばかりで仕様がねいのう、それはさうと先刻豪い盗人が此川の中へ飛び込で、まだ知れねいてんだ、どうだい摑へたら褒美貰へべいか。』
辰『そりや貰へるとも、ヤー、コウ見や、かう云ふ處へコリヤ水が掛つてるぞ誰か這ひ込だに違ひねい、事によつたら盗人だん

べいが、』ヱ、ヱ捜せ〳〵と、ぶる〳〵震へながら船頭連中、あらかた捜して居ないから一同引上て仕舞た、船底に居た正太郎ホット一息ついて夜の更くるを待て居ると。

フシ（其夜は次第に更け渡る、折柄致して遙かあなたの方にて、雪折れ笹にむら雀、たとへ年季が増さばとて今朝の寒さにや歸へさりよかと、乙な處より聲たて、）

詞（素見戻りの投げ節を唄ひながら戻て來る人がある。）

（オー、時刻も好からんと船底から出た正太郎。）

フシ（小船に乘て逃げる途中、造幣所の河岸で、水上の巡邏船に

掴りまする一ッの混雜は、此次の一席にて、又讀たてる先は、止むる次第。）

◉牡丹燈籠　東家樂遊

フシ（喜怒哀樂の情を含みしお藝題で、牡丹燈籠と題せるを記憶致せるを讀み奉まつる。）

詞（此所が根津の清水谷、萩原新三郎が良石和尚の情に依て、守札を貼り觀音如來の金の御佛を肌へ附け大陀羅尼經の經文を讀で居た其眞夜中頃、何處ともより出で來たりましたるお露お米

宅の樣子を見てあらば戸締嚴重ゆへ彼のお米が、）

米『お嬢樣、萩原樣の心が變り、戸締りが嚴重に附きましたれば心の變つた殿御はフッツリと諦めて下さい。』と、

フシ（言はれて彼のお露、秋草色染の振袖を、顏に當がひさめざめと、コレ米よ、外の事ならば諦らめもしよが此事ばかりは諦める譯に行かぬで今一度、萩原樣に、逢はせ呉れと賴むので、愈々共々の札剝しは明日の此席にて、又讀み立てる先は止る次第なり）

◉小松嵐　東家樂遊

フシ（勤王美談は小松嵐の一席記憶致せしを讀み奉る。）

石川郡が塙の宿花屋と云ふ宿屋女郎屋兼帶の、家の庭先の井戸端に於て馬子のお時は、丸の裸體腰卷一かんにされまして、後手にいましめられ般若の仁藏に武虎當家の主人お霜の三名が水をかぶせて打ち叩いて、

仁『サーどうだ勤をするかしねへか。』

攻めつけられて馬子のお時、

時『假令どげいな事されても己サにはそねいな穢れた事は出來ねい、殺さば殺して下さい。』

仁『オー殺して呉れと云ふなら望にまかして殺してやらう。』

サーどん〳〵水を掛けろ、合點だと武虎が水を汲んでは被せればお霜は打ち叩く、其つらさは幾何ならん。

フシ（殺さば殺せと馬子のお時、齒を喰ひしばりて兩眼閉ぢ、こらゆれますれど初は冷たく中は暖かく、末は更に覺えはなく思はず知らず風呂場の方に倒れける樣子眺めた般若の仁藏。）

仁『ヤイ、是までされても己は勤めは出來ねいのか、アー讀めた己が圍つて逃がした小松龍藏に惚れて居るんだな。』

物陰で樣子を聞て居たる家來の權治、ハット驚き耳をそばたて

見れば、一旦氣絶をしたお時を、
フシ（物置へ連れ込で介抱致し氣が付たで一同は己等部屋へと戻りました、始終見付居る權治は物置小屋へと參られる。）

◉鹽原孝子傳愛馬の別（上）

東家樂遊

フシ（沼田土産と題せる、塩原の孝子傳、記憶致せるを讀奉る。）
九月の二十三夜に多助が沼田の原物見の松に青の手綱を結ひ付け、青の鼻面撫でゝ、

多『青よ、われがと俺とは畜生と人間との違ひはあるだが、俺は眞實の兄弟の如くに思つてるだア、喃、山坂道に差掛りや汝エ骨だんべいと思ふから、三俵の米は一俵俺が脊負つて歩いた、たからの血溜も一つ出ねいクサメも一つしねいだア働らいて呉れたが、俺は實はの、阿母があの通り心得違ひ、また女房のおゑいが心得違ひどうしても、俺は此沼田にやア居られねい。』
フシ『お前と此所で別て、江戸へ行きどんな奉公でも、致した後は、金を溜て、戻り來たるそれ迄は、汝がも、身體を達者に暮し呉れと馬に向うて彼の多助が涙ながらの物語。）

◉鹽原孝子傳愛馬の別（下）

フシ（致しますれば彼の青は、主人多助の言し事が分りしか次第〳〵に頭を下げてホロリ〳〵と玉の露、樣子ながめた多助。）

多『ヤア青汝がな俺に別が辛いと思ふて泣たか有難てい〳〵喃、畜生の汝がでせいも別れが辛いと泣くものを、俺が母樣は叔母と甥、おゐいは從兄姉同士でありながらあんたる畜生に劣た奴だんべへ、汝に別れ度アねいが喃、青、別れねいぢやアならねいのだぞ。』

フシ（と頸へ縋りて我を忘れて男泣き。）

それぢやア果しが付かぬと多助が思ひ諦め、

多『青よ是で別れるぞ。』と、

（儘スタ〳〵行かんとすれば、青は悲しき聲あげて鳴く。

フシ（後髪を引るゝ心地の多助が、思ひ諦め江戸へと乘込むばッかりで、此所が神田の佐久間町河岸が、炭問屋山口屋へ奉公に、入まするとと云ふ、愈々多助の働きに移るのは、此次に出演をば致しました其節又讀立る、先は止る次第なり。）

◉大石東下り

東家樂遊

フシ(雪の曙、忠節美談、此處に大石内藏之助、東下りの一席。)

神奈川の宿はづれの松並木で、宰領役の武林が、人足頭の彌十を蹴殺したと云ふ事件に付て、大石内藏助、其死體を檢分致したる際に、人足頭の彌十は眞に死だにあらず、死だふりをして居た、大石が試めし切をなさんと致さば人足頭の彌十は逃げて仕舞ふ、宿役人十三人をおどかした大石が、我は京都近衛關白殿の雜掌垣見左内、汝等輩は不届の奴ぢや、此分にはして置かれんから左様心得ろ、とおどかして、川崎泊を神奈川の脇本陣に泊ると云ふ事になつた、大石内藏助は風呂より上り今になんとか詫に來たらば、好加減に懲して許てやらんと思ふ處に、武林があわたゝしく來たつて曰く、此神奈川の驛の本陣に垣見左内と云ふ御人が泊て御居になり、貴殿を僞者捕て押へんと云ふて來たそうだ、御油斷あつては相成ませんと云はれたとき。)

フシ(アット驚く大石が、一度遁れりや又二ッ、三ッ四ッ五ッがむづかしの世、蛇の口遁がれて、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、再び虎穴に入らんとするとか。)

しばし考へて居た大石が、何思けん奉書へサラ〳〵と認めたを懐中に入れ、

大『良金、今に垣見左内が來たらば此父と爭ひを致す、父が敗けそうになつたらば垣見氏を一刀の下に切て棄て、後の始末を付て呉れい。』

フシ（神奈川に殘りて後の始末を付けるのも、江戸へ乘り込み仇討も、忠義の二字にかはりはない、茲に垣見左内が乘込むので、大石との談判は之で、止むる次第。）

◉海賊房次郎（上）東家樂遊

フシ（都新聞連載で海賊房次郎惡事の其顛末、讀み奉まつる。）

明治十四年十二月の朔日、石川島監獄署より深川數矢町道路修繕外役先から逃走致した房次郎が、大島町の裏長屋、明屋の中へ飛込で天井裏へ隱れ、夜の更けるを待つて居ると。

フシ（其夜は次第に更け渡ると、遙か彼方で聞ゆるは雪折笹の群雀、例へ年期が增ばとて、今朝の寒さにや歸さりようかと、素見戻りの投節を、唄ひながらに參ります。）

此聲が途切〳〵に聞ゆれば、もう十二時間近であらう乃公が豫て恩を被せたウロ船の善吉が戻つて來る數矢町河岸、彼奴を頼んで小船を一艘都合して貰つて逃るより仕方がないと。

フシ(そつと出でたる彼の明屋、數矢町河岸をば指しまして房次郎が乘込む、河岸へ參りました房次郎が、材木の間へ身を忍ばして、うろ船善吉來るのを今や遲しと待受けた、彼方の方よりも荷足船漕ぎながら此方を指して。)

◉海賊房次郎(下)

あなたの方より船を漕ぎ來つたウロ善が、頭を上げて空を見れば、

フシ(空はどんより雨曇り、今にも雨は降りなんとする。)

ア、寒い〳〵、此樣な晩には早く歸つて美味い酒一杯も飲で早く寢ていものだ。と、

フシ(獨語をば言ひながら、戻り來るが數矢町河岸。)

樣子眺めた房次郎が、『善公……善公。』

フシ(此聲きいたうろ善が。)

『誰ですエ、善公ッてつたなア、』四邊を見たが人が居ない、思は

ず知らず身慄して、いやだ〳〵、此處は癩が居るんだぜ、早く歸らう歸らう、何だか寒くなつた。

フシ（尙も漕で行かんとすれば房次郎が。）

『善公、乃公だ〳〵別人にあらず乃公は房次郎だ、少し手前に賴みがあるのだから待て呉れ。）と、

フシ（船を岸へと着けさして、此の男に賴んで、小船で逃げ出すを、永代の此方で、水上の巡邏船に見咎められて追駈られる、愈〳〵房次郎が箱崎川へと飛込むから、華族山ノ内家の屋敷内へ逃込ひで、とんだ騒動の幕明きは此次に讀みませう、御時間も見えたんで先づは、止むる次第なり。）

◉忠僕直助（上）　東家樂遊

フシ（花より明くる三芳野の春の曙見渡せば、唐土人も高麗人も倭心になりぬべし、播州赤穗の直助と云ふが主の爲めの苦心談記憶致せしを讀みたてまつる。）

大阪天滿裏門前、津田越前守助廣が厠へ行つて戻りの道、雨戸を開いて手を洗ふ、途端に聞ゆる水をかぶる音、何人が水行致して居るか見て遣うと、

フシ（庭へ下りた越前が差足抜足、忍びの足、井戸端間近に近附て、）

（物蔭へ身を潜めて様子伺がへば、弟子に成つた赤穂の直助車井戸の綱につかまり、汲上ましては頭よりかぶる。）

◉忠僕直助（下）

（又汲上げてはかぶり。數杯かぶり。助が）

フシ（兩の手合せて、日頃念ずる伏見のお稲荷様御利益顯著に在さば一日も早く名ある刀鍛冶に成しめたべ給へ又二にて國の播州に御在である御主人御夫婦とも身體を大切に無事にお暮しなさるやうと。）

（水をかぶつての信心に、越前守助廣が之をながめ、噫此男は必ず立派な刀鍛冶になると感心した。）

フシ（愈々是より直助が、三年目には畏れ多くも皇子御降誕に相成たに就て、天子の御枕刀を打ち納めて、津田近守守助直と任官助力の顛末は、此次で又讀み立てる。）

◉觀音丹次

フシ（生の親より育ての恩、孝と義理とのしがらみや、頃は安永天明の年間に、憂き艱難や苦勞して、美事養父の仇を討、男の中の男よと、名前を擧し觀音丹次が一代記）

詞『處は野州の水澤に高橋丹左衞門と云財産家が御座います。とかく金持と子寶とは釣合ぬが極りと見えます。丹左衞門最早當年三十八歳にもなりますが、子と云者が御座いません。女房のお瀧も始終之を苦に病みまして、どうか高橋の家を嗣べき子が欲いと

夫斗りを朝夕に話致して居りました。何うも子寶斗りは思ふ樣には參りません。種が惡いか畑が惡いか、しらべる譯にも行きません。此上は神樣へ御すがり申、詣子をしようと夫婦相談の上で、協はぬ迄も賴んで見ようと、只今でさへ中にはづいぶん迷信に凝方もあります位、況て昔の事ですから、女房のお瀧さんも、神樣に賴み一子を授けて頂ふと、水澤の宿にある水澤の觀音と云のが御座います。夫へ三七二十一日の間日參を致します。さあ雨が降ても風が吹いても我家から十町足ずの所を、伴女をも伴す只一人思ふ念力岩をも通すと、毎日〳〵今日はお告があるか明日は有か

と樂に參詣を致して居りましたが、丁度今日は滿願の當日で安永三年九月十七日の事で御座ますつ。お瀧さんは今日の滿願に、何か現が有相なものと頻に社前に蹲んで、兩手を合して一心に拜んで居りますと、何處ともなくオギヤ〳〵と赤兒の泣聲、はて不思儀や、

フシ（お瀧さんは、耳に這入た赤兒の泣聲に、扨は何誰か參詣の方が、子供を抱て來たのであろふと、起上つて後をふり向き、あたりを見れば野原故、人の來る樣な氣配もない。又泣聲もハッタと止む。）

詞『お瀧さんは心の中で、あら可笑事もあるものよ、私とした事が餘り子が欲い〳〵と思ひつめて居たので、不圖赤兒の泣聲が耳に這入つたのであろう。いやこんな寂しい野原の事故、若や孤狸の類か人を誑かすのでも有ふかと、二足三足歩き出しそこらキョロ〳〵見廻す内、又も聞ゆる赤兒の泣聲に、こりや不思議どうした事と、耳をすまして聲する方を慥めと、どうやら社の横手らしい氣味が惡いがお瀧さん、社の横手へ來て見ると、松の根方一人の赤兒、黑羽二重の紋附を着て、唐草模樣の綸子の卷蒲團に包まれて捨てあります。お瀧さんは心の中で、扨こんな立派な衣裝を

着た捨子とは、若や狐狸の化て居るのでもあるまいかと、傍に近寄能く〳〵見ると、やう〳〵に百日程經た位の赤兒、正しく人間の子供らしい、玉を欺く樣な綺麗な子供で御座いますから、子供欲やと思ふて居る矢先、天より降たか地から湧いたか。

フシ（思はず赤子を抱き上げまするとハッタと泣き止んで、お瀧さんの顔を眺めて、ニッコと笑ました可愛らしさ、是は正しく觀音樣がお授け下すつたに違ひない。）

お瀧『おゝこりや可愛らしい赤ちやん……。』

と、頬ずりしますと、赤兒は口をもが〳〵します。お瀧さんは搖

ぶりながら『おゝお乳が戀しいと見へる。』と出もせぬ乳を當がふと、チユウ〳〵吸つく可愛さ、無中に顔を眺めながら、不圖卷蒲團の中に堅い者が手にさわるから、出して見ると一振の短刀で、金銀を鏤めた立派な守刀で御座まして、三葉葵の紋散中身は正しく正宗かと見えまする。お瀧さんは驚ろいて『葵と云ば將軍家の御紋、こりや此赤樣はいづれ由緒あるお方の落胤であらう。衣裳と云樣子が可笑い是には何か、仔細が有ふ今日滿願の當日に、或はお觀音樣から此赤樣を、お授け下されたのであろう。ともあれ家へ歸り所夫に物語りを致しませう。』とお瀧さんは、

フシ（餘りの事の嬉しさに、夢路をたどる心地して赤兒をシッカと抱き〳〵、我家をさして戻り來る）

詞『お瀧さんは早速夫に話ますと、丹左衛門の喜こびは非常なもの、早速卷蒲團を解いて見ると、帶端に一通の手紙が結付てありますから、讀で見ると手跡も中々美事に、育てられない譯あつて此一子を捨る故、拾ふたお方は何分共に養育の義を賴むと認め、而もクリ〳〵した男の兒で御座ますから、夫婦の者は夢かと斗り喜んで、是は全く觀音樣の御利益にて、一子を授けて下さつたのだと、夫から乳母を雇ふて、蝶よ花よと育て名前も丹次郎と付げ

ました。之が後年忍の行田の俠客小天狗小次郎と兄弟の、義を結びました觀音丹次の、生立で御座いまする。後に至つて實父が知れますが、夫は奥州會津二十三萬石松平肥後守の家老馬場覺右衛門と云人が、未だ部屋住の頃女中に手を附た爲に、勘當を受け仕方がないから女中のお里と共に手に手を執て、野州水澤在鹽屋村に落付、手習の師匠などして居ります内に、お里が懷姙産み落したが此の丹次郎、間もなくお里は産後が惡く遂に亡くなりました所、男世帶で乳呑子を抱へた覺右衛門、どうする事も出來ず途方に暮れたあげく心を鬼にして觀音堂の脇へ捨たので御座ます。夫

ですから丹次郎は家老の兒で御座います。而し高橋家ではそんな事は知りません。只由緒ある人の子であろふと、大切に育てゝ居ります中に、月日は夢と立ちまして、丹次郎十歳となりました秋養母のお瀧は持病の癪が基となり、僅一月程わずろふて遂に果敢なくなりました。丹左衛門父子の力落しは大層なもの、泣く〳〵菩提を懇に吊ひました。然るに丹左衛門今年四十六歳で御座ますから、未だ老年と云程でもありませんから、秋の長夜の徒然に閨の寂しさを感じまする所より、

フシ（我國はやまとかぐらの昔より女ならでは夜の明ぬ國と、と

かく遠くて近きは男女の間、女中のお輪と云が、小綺麗で澁皮剝た仇姿に、手を掛けたのが騒動の基とこそはなりにけれ）

詞「女中のお輪と云は、目先が利て口前が能く中々悧口そうで御座いますが、斯奴一通ならぬ毒婦で御座いますから、丹左衛門を旨く丸めまして、とう〳〵後妻となつて仕舞ました。夫から丹次郎を可愛がり、自分から先へ立て下女下男を親切に、使ひますからいづれも御新造様々々と大切にする、丹次郎もお繼母さん〳〵と慕ひました。其年も暮て明年の春の事で御座ました。

フシ（或る夜の事でありました。夜中頃から丹次郎、腹がシクシ

ク痛むから、厠に入つて大便致して居りますと、雨戸へコツンと小石でも投た樣子に、こりや何者か切戸の外へ來て居ると見へる）

詞『子供ながらも丹次郎、ハテナどうした石であろふまさか子供が投た石でもなかろふと。雪隱の窓から外を眺めて居りますと、誰とは知らず雨戸をそつと開る音に、扨は義父か養母が小用に來たのか、と思ふ内に庭の踏石に駒下駄の音がするが、コトリ〳〵と切戸の方へ運びまする。其夜は丁度鎌月夜でしかと姿は見えねども、どうやら自分の養母らしい。『根が度胸の坐つた賢い子ですから、可笑ぞお母さん今頃どこへ行くのだろうと、ジツと樣子を見て居りますと、やがて切戸の際で、『金さんかエ』と小さいのに言は正しく養母のお輪で御座います。此時切戸の外では、『オヽ金助だ』お輪かと云聲に、ジイ……と切戸が開きました。此金助と云奴は、綽名を向疵の金助と云て、元信州上田の博徒で、いつも博奕に負るので上田にも居られなくなつたので、内緣の女房お輪と共に、野州水澤に程近き島田村に來て相替らずごろ着て居た所が此のお輪と云奴、酢でも蒟蒻でも行ぬと云ふ毒婦で御座います。何か旨い事もと探す内に、此高橋へ女中に住込み、金助と夕

マサカ密會しては、高橋の財産を横領しようと思ふ矢先に、此度お輪が丹左衛門の後添となり、金が自由になるを付込み、博奕に負ると小石を投ては呼出し、小使をせしめる。人の家も斯んな奴に住込れてはお終ひで御座います。今宵も其密會をするので御座います。

輪『金さん、お前の様にそう來ると、ほんとうに困るよ。度重なれば現はるゝと仕舞に、こんな所でも誰かに見付つてごらん、大變になつて仕舞よチッと遠慮してお呉よ。』

金『うむ。己だつて解つてるが、運が惡くて博奕にや負通し、一

枚二枚と脱て仕舞ひ、ふるつて居るに引かへて、手前は絹物ずくめじや、ちつとも察してくれ手前の外は、猫つ子一匹抱寢もせず辛棒して待て居るに早う片付けて了へば……。

輪『中々どうして人目の關があるのに、夫にあの子怜い丹次郎油斷のならぬ、賢い奴外に番頭やら手代やら、どうして易々仕事が出來るものですか。』

金『ふむ旨い事吐上るぞ。そろ〳〵金助に秋風を吹して來たな。』と、ポンとお輪の肩を叩く。

輪『お止しなさい聞たくもない嫉妬深い阿呆らしい事言んすな。』

と、金助に凭れて掛り人目が無と思つて巫戯け散して居る樣子を誰知るまいと思ひきや、雪隱の中から丹次郎子供の事故、細い事は分らんが、怪しい事をするお母さんだといきなり飛出し、手水鉢の水を吸より早く、兩人の頭からサブリと浴せ掛た、兩人の奴は驚ろいたの驚ないので、話にならない。こりや失策つたと振り向と、丹次郎で御座いますから、お輪はそ知らぬ顏で、

輪『おゝお前は丹次郎でないか。どうしてそんな所へ今頃來たの……。』

丹『あら、お母さんでしたか。私は又犬かと思つてね……。』

云ながら今廊下を傳ふて行ふとすると、金助の奴、麼は大變だと持たる手拭をグル〳〵ッと扱き、丹次郎目掛て首筋へサッと掛けた、アッと倒れる所をグッと絞め上たから、堪らない可愛相に丹次郎は其儘、息が止つて了ひました。さあ斯なつて仕舞ば肝腎な觀音丹次の、話の種は丹次が死と一所にお終ひになるのですが、邪は正に勝れません。圖らず丹次郎は一命を取止ますので御座います。扨此時お輪は駈け寄て、

輪『おや金さん殺つて了つたの。』

金『うむ小さい餓鬼でも油斷は出來ぬ。生して置て今宵の事を饒

舌られては、今までの辛棒も水の泡じや無か。』

輪『あゝ夫もさうじやが、斯んな所で殺して了つて死骸をどう

する積なの。』

金『何死骸ッ、そんな物どうでもなるじや無か。今宵の事を知て

居るのは、此餓鬼斗だ是から、己が歸り道水澤の池へドブント

投込ば雜作はねへ。』

輪『そんなら金さん。見付らぬ樣に、旨く御遣よ。』

金『よし合點じや、夫じや又くるから……。』

と、金助の奴は、丹次郎の死骸を擔いて、切戸口から出て了ひま

する後にはお輪の奴。

フシ(金助の後を見送つて居ましたが、こりや旨く行たわい。幸

ひ家の者にも見付られずと喜こびながら、切戸口を閉ようとし

て獨言『いや〳〵此處を締めては、あの丹次郎の出ていつ

た跡が解らない。此處は鍵を置なけや相成ぬと、惡い智慧には

長たるお輪、其儘に致して置て、己が部屋へ立戻りそ知ぬ顏に

寢て了ひまする。お話變て彼の金助の奴は)

詞『丹次郎の死骸を擔いで、水澤の宿外にある水澤池まで遣て

來て、小石拾ふて丹次郎が袂へ一杯入れまして、邊見廻しドブン

……と水音高く投込だ、ブク〳〵ッと沈むを見濟し、

金『うむ斯して置ば大丈夫だ。』

と。其儘トン〳〵〳〵島田村へ歸つて了ひました。扨て是から跡はどうなつたか、此方はお輪寢床へ這入たが何で寢れやう『定めしあすの朝は大變だろう。其大騒の中に自分はどんな、顔してとぼけて遣ふか』と、夫よりもあの金助は旨く遣て呉たか知らんなど、あれや是やと頻に考へ居る中に、

アシ（早夜もホノ〳〵と明の鐘、のき端に囀る雀の聲もチユウチユウ〳〵と聞ゆる頃と相なりました）

詞『すべて在方は朝起で御座います。夫れ〳〵起て用事に掛る、お輪の奴心の中は容易でありません。わざと落付鏡臺の前で髪を梳上ながら、今にも騒が始まるかもう騒ぎ相な物と、心待に待て居るが、一向騒がぬ扨て不思議と鏡臺を放れて、火鉢の前で煙草一服すつて居ると『お母さん、お早う御座いますと丹次郎が這入て來たのには、流石の毒婦も丹次郎の顔を眺めて、オヤッ……と許り驚たの何のつて忽ち顔色土の様になりましたが、根が圖太い女で御座いますから、

輪『お丶丹次郎か、大層早いね。

丹『はい』

輪『丹次郎お前夕宵の事覺えてお出かへ。』

丹『はい何でもお母さんが、餘所の人と話をしてお出だつたが、其人が私を絞殺した迄はたしかに覺えて居ります。』

輪『フウン夫迄覺えてお出かへ、だけれどお父さんにも誰にも話はすまいがのう。』

丹『はい未だ誰にも話は致しません。』

輪『おゝさうかへ、夫で私も安心しましたのう丹次郎や、お前はんとうに賢い子だから夕宵の事、誰にも話てお呉でないよ。何

もね殺す積じや無つたのに、どうした拍子か彼んなになつて、私も大層心配したに無事で歸つて、まあよかつた。』

丹『お母さん、そりや何かの間違ひで御座いませうから、決して誰にも云ません御心配なさいますな。』

輪『おゝ能う云て呉ました。どうぞ言ないでお呉私がお賴じや、其かはり何でもお前の好なものを、買て上よう程に、併しお前はどうして助つたのかへ。』

丹『どうしたのか私あ、知らないが何でも池の中へ投込れたのを何處の人だか助て呉て、私を家まで送てくれた所、裏口が開て

たから家へ這入て、其儘寝たので御座います。』

輪『さうかいまあ結搆だつたね。私もあれから直に人を起さうと思つたが、夫では彼人が人殺しになるし、こりやどうしようと思案に暮て居りましたに、ようまあ助つて來てお呉だ。ねい丹次郎夕べの事は、全く私が悪かつたどうぞ勘忍して誰にも云て御呉でないよ。』

丹『何お母さん言ぬと云たら、きつと言ませんよ。』

と、云のでお輪の奴一時はほつと、胸撫で下しましたが何を云ても子供の事、あゝは云ものゝ當にはならぬと、夫からはもう丹次

郎々々と、一通ならぬ可愛がり様で御座います。扨て丹次郎を助たのは、水澤池の畔に蒲鉾形の小屋を、立て住でる非人六癪の爲に、危き生命を取止たので御座いますが、元來氣象の勝れた丹次郎ですから、一旦云ぬと云た以上は誰にも話は致しませんが、以前と異らぬ風をして、お母さん々々と云ては居るものゝ、お輪の様子を眺めて居りました。此方は向疵の金助の奴で御座います。知らんふりして水澤村へ來て様子を見ると、高橋では別に變つた様子がない。こいつ不思儀と内々で聞て見ると、丹次郎はちやんと家に居ると云ので、驚たのは金助こりや大變だと、夫から一月

斗は水澤へ足踏も致しません。所が或夜金助は例の通りヒョッコリ、遣て來ましたは高橋が裏手、

フシ(いつもの合圖と電話の替り、小石拾ふてぽんと、投げる、窓へ當りてコツリと音がするを、聞つけたお輪の奴、此金助はどうした事やら、今日は來るのか明日もかと心待に待て居りまし所を、ソッと己が居間を拔け出して、足音靜かに出て來たのは裏手の切戸)

輪『金さんかエ。』

金『ウム。』

輪『待て居たよ金さん。』

と、切戸をスウ、、と開る。

輪『私あ今日か明日かの内、是非にお前に逢たかつたに、氣が通じてか、夫とも神樣の御引合せか、ほんとにまあ能く來て呉ましたね。』

金『己も何だか逢たうて堪らなかつた。ふむ夫よりか樣子を聞あの小悴め、どうした拍子で助つたのか、己あ是斗は不思儀で堪らねいが……。』

輪『金さんお前よりか、私あまあ何なにビックリしたか、知れや

しないのよ朝起て見ると、驚くじやないかお母さんお早うと來るでせう、夫からまあ旨くだまかして口止はしたものゝ、根が賢い子供だから何んな考へを、持て居るかわからぬ。いづれ遲かれ早かれ、バラして了はなければならぬが、夫よりも主人の方を先へ殺て了わなけりや、私が自由も出來ないしそうすりやお前と晴て逢ことも出來るじやないか。』

金『ウム、夫りやそうだが、あんな小僧にさへもあの姑末じや、大人となりあ大分骨も折るだろう、何う云工夫にすりやよいか已にあ一寸宜い考も出ない樣じや。』

輪『ほんにお前さんも餘程老耄たもんだネ、此間もあんなへマな事をおしだし、此處で丁度よい機が來たもの故、夫でお前に早く逢たかつたのじやないか。』

金『して其宜い機とは……。』

輪『モソッとこちらへ御寄よ。』

と、耳に口よせさゝやきます子細は、どう云事だといつたら、高橋の主人丹左衛門が此の二三日先から、島田村の弟丹太夫の所へ、用事あつて泊がけに居てるから、明後日はきつと歸るから、其の歸りを待伏てバッサリ斬つてしまつたら、誰の仕業か解らな

いどうせ家は騒動じや、やがて葬式も濟だ頃お前さんが、斯々云風に遣て來てお呉よ、そこで芝居が都合よく行けば、後は私の腕次第何うにでもなるから。』

輪『金さん何と此の考へは旨かろう併しお前は、其通りに遣るかへ。』

と、ポンと背中をたゝかれて、

フシ(うむ〳〵成程〳〵と聞て居ました金助奴)

詞『おい〳〵お輪、手前やあ惡事に掛ちや己より余程上手じやな

金『成程そいつあ宜い都合だ、よし一番美事遣付けて見るから……

……。』

輪『おゝ金さん必ず拔からずお遣なさい。』

金『合點だ、今度は此前の樣なへマな事はしやしないから。』

と、云ので双方どうか旨く行けばよいがと、此場を別れて了ひましたが、此處に舞臺がクルリッと廻ります。

フシ(夫より致して二日經ちたる夕間暮、晝さへ凄ぐ人通りも稀に見る樣な難所なる島田水澤の村境。音に聞えた丸山堤を伴をも連ず只一人、足に任せてテク〳〵と參りましたは、余人にあらず高橋の主人丹左衛門とこそは知られける)

詞『扨も丹左衛門は島田村の弟、丹太夫が許へ參りまして用事萬端、濟みましたから早くも我家へ歸らうと、晝さへ凄き丸山堤をテク〳〵と戻つて來ました頃は、日も西山に傾きて塒へ急ぐ烏の聲も、カア〳〵と陰にひゞき自分の外には人通も見えません。丹左衛門はあたりを見廻し、

丹『あゝ何て淋しい所だらう、お、そう〳〵此間もこゝらの松の木に、首を縊つて居た奴が有た、こりや何だか氣味が惡くなつて來た。』

と、夫やさうでもありませう現在連添女房が今此身を亡きものにせんと、其手配をしてゐるのですもの。そんな事とは神ならぬ夢にも知らず、早う我家へ歸らうと今しも庚申堂の前をスタ〳〵と通り越うとする、折しも庚申堂の裏手より現はれ出たる、一人の惡漢。

フシ(人目を包む頰被り、尻はし折て素足の儘腰にや一本ぶち込で、喧嘩刀の長いやつ右手に柄頭をしつかりと握つて、丹左衛門を二足三足遣過し、ぬき足さし足忍足)

詞『伺ひ寄たる曲者は、云ずと知れた向疵の金助、丹左衛門は後に左樣な敵が居るとは、夢にも知らず元來、武藝の達人と云じや

なし、帶刀御免の身の上故、腰には一本帶して居るが、伊達じやなけれど欺討の時の防禦には、とてもなりません。今や金助は時をはかつてギラリ一刀拔より早く、物をも言ず後から肩先を「バツサリと斬付る。つもりだが腕がさへないからゴシ〳〵と引斬た。アツと許に丹左衛門肩口押へて、バツタリ倒れた所を忽ち躍り掛つて、右の耳から顎へさして斬付る。所がこんな奴は劔術の修業して居ると云わけでもないから、人を斬と云ても無茶苦茶斬だ。所構はず滅多無性に斬り刻む樣な物で、其内に致命傷となるべきものがあつたのでせう。とう〳〵丹左衛門は丸山堤の、夕靄

と共に非業な最後を遂ました。息の切ると共に金助は其儘姿を隱して了ひました。暫すると水澤村の者が、此所を通り掛り在所の金滿家高橋の主人が殺されて居るから、びつくり仰天腰を拔さん許に飛で來て、高橋の家へ知らすとさあ大騒動で御座います。早速召使の者や村人が寄集つて、死骸を家へ運ぶやら、親類へ知らせに行くやら、上を下への大騒の中に毒婦のお輪は心の中で旨く行たと喜んだが、色にも出さず出もせぬ涙を唾で胡麻化し、涙にくれて居りまするから、賢い樣でも未子供の丹次郎、まさかにお輪が企んだ事とは考へがつきません。さあ誰が殺したものだと詮

議した。所が見た者もありませんから、只今と違ひ昔の事ですから、其邊は手ぬるいもので御座います。そこで先づ犯人は代官の方へ願つて置て、葬式萬端を濟せまして、初七日過て二七日、三十五日や四十九日のとひ吊へも、致しましてから親類中の協議の上、丹次郎を戸主にしてお輪を後見人と云事に定めました。さあお輪はとう〳〵思ひ通りになつた。今は高橋家の全權を握つて仕舞て、大した權力何でも一切の事が、自由自在になるから榮耀榮華を致して居りまするとと、或る日の事で御座います。

フシ（へい御免なさいと表から、這入て來ました一人の男、年の

齡は三十五六、旅から來たと見えまして、脚絆紺足袋草鞋ばき小さな荷物を肩に掛け、五分もすかさぬ旅裝束で這入て來た）

詞『番頭の久七と云ふのが、

久『貴方は何誰樣で御座いますか。』

男『はい私は信州上田の丸龜金助と申します者ですが、御當家の後添になつて居るお輪の兄で御座います。毎度〳〵妹から來いと云てくれますが、ツイ商賣が忙しい者で、ご無沙汰致して居りましたが、此頃は大ぶん暇になりましたから、江戸見物旁々一寸立寄まして御座います……。』

久『はあ左様で御座いましたか、只今は後家さんになつて居られますが、元此方に女中奉公して居た頃の、お輪さんのへい貴方はお兄さんですか。ふだんからお兄さんの有と云事は、一向聞て居りませんなんだに……。』

と、云問答を奥の間で聞て居たお輪の奴。

フシ(扨ては戀しい金さんか、兼て相談した通り、ばつを合せて來て呉たのか、待てば海路の便とやら、是から當家へ引込で財産横領致さにやならぬと、心いそ〳〵喜こびながら、店の間さして出て參り)

輪『お丶お前は兄様か、どうやら聞た様な御聲だと思ふたに、久方振じやお懐かしい。サア〳〵兄さん何うぞ此方へ……。』

金『やあお輪や、暫く逢なんだが變りもないか、今ではお前も結構な身になつたと、手紙を見て喜こんで居たが、今も番頭さんに聞や後家になつたとは、一体旦那様は何うなさつたのじやえ

輪『ほんに兄さん喜しいと思つたも、束の間で旦那様は、何者とも分らぬ人手に掛つて、非業な御最後遂られました……。』

と、云さしてワッと許に顔に袖を當て泣き伏ます。どうも其旨い事遣つたら帝國劇場の、女優も洗足と云有樣です。此兄さんは云

ずと知れた向疵の金助です。此奴も旨く相槌うつて、ヱ、、、そんなら旦那様が……と驚いた様な顔をして居やがる。何の事はない傍で見て居りや、本當の兄としか見えません。

フシ（是からいよ〳〵、毒婦のお輪思ふ男を引摺込で、酒よ肴よと、毎日毎夜と金助を相手の痴話狂、人目には兄さん〳〵と、知らん顔して呼んで居る。扨も兩人の奴等或夜ひそかに一室にて、ヒソ〳〵話、丹左衛門は旨く行たが、とても此家をのり取には、あの子悴の丹次郎、今一人が邪魔になる、あいつが生て居る内は、兩人はとても枕高く寢る事も叶はぬ、旨く殺して了ひたいと、相談致して居る事を誰知るまいと思ひきや、次の一間で殘らず聞た觀音丹次、扨は父を殺したも先日己をこまり殺したも、此奴等の所業であつたるか、おのれ其手に乘ものか。うらみ重なる養父の仇覺悟しろうと。夫とは知らず金助奴が丹次郎を、連出して殺さうとするを、反對に正宗の守刀で金助に斬て掛ると又もや非人六藏の、助太刀で之から觀音丹次が、名前を賣出す端緒に相成まするが、余り長いは諸君に無禮こゝらで御免な仕つる）

◉水戸黄門

フシ（治まる御代のためしとて、枝も鳴さぬ時津風、實に太平の有難さ、弓は袋に劍は鞘に、長押に掛けた薙刀も、富士にはあらで塵の山、山も常陸の西山に、隱居遊ばす御方は、水戸黄門と尊ばれ、前の從三位副將軍、光圀卿にてお在なり、耳に千里の外を聞き、眼には宇内を達觀し、うつり行く世に先だちて、着々あたる君が言、まことや君は臥龍なり、誠に君は鳳雛よ、此明君が迥々と、諸國漫遊の一條り）

扨て德川光圀卿には、追々御老体にお成遊ばしたので、御子息綱條卿に御跡を讓り、御自身には水戸城を去る事、五里許りの所に太田村と云ふがあります、其所へ極く質素なる御別莊を立てられて、御引移りに相成、西山公と申して居ります、公には彼の最明寺時賴公の傳を御續になつたのか、普く天下の政道を視て其正しからざる者は、直に其城中に入つて質し、又世に埋もれし忠臣孝子は、是を賞表して遣んと思召され、お忍びの体にて御自分は天神林光右衛門と御名乘になり、御近從の渥美角之丞、佐々木助三郎の兩人を、助さん、角さんと稱へさせ、恰も豪家の隱居が、

番頭手代を連ての旅行の樣な、姿にして御出立に相成ます、其御旅行の中の一節で御座います、頃は丁度四月は半過ぎ、中仙道では有名なる福島の、關所の前までお出になり、松の根方に腰打掛られ、

光『あゝこれ、兩人之が中仙道では有名な、福島の關所じや、我一門尾張の領地故、定めし夫々の役人は居るならんが、如何樣な事になし居るか一應改めねばならぬ。』

兩人『御意に御座ります。』

そこで光圀卿には、兩名を召連て彼の關所の、前をズン〳〵お通りに相成、定めし嚴重に役人共が、勤めて居るならんと思ひになると、僅二三名の者が當番して居るから、光圀卿にはかまわず通ろうとします、すると彼の役人が、

役『あこれ〳〵其處へ行く旅の者、何れへ參るか國所を申せ。』

と大聲で呼び立ますを、聞えぬ振してお通りになると、關所から兩名の者が、六尺棒を以て、

役『これ、先刻より度々聲を掛るに、知らぬ振して通り越とは狼籍者であろう。』

と呼はりますが、矢張聞えぬ振をして居ますから、

役『己れ、不届な奴。』

と老公の兩手を取て引立ますから、老公はお笑ひなされながら、兩人の役人に引立られて、玄關まで連てこられたすると、重役の者が出て來て、

重『ヤア其の方は何れの國の者か、忽体なくも當關所は、尾張大納言殿の御關所、即ち將軍家の御關所じやないか、お届けも致さず通行するとは、不届至極の奴じや、何れの國の者なるか、審かに申せ。』

と大音に叱り付ますが矢張ニコ〳〵笑つて居られます故、役人共は烈火の如くに憤ほり、

役『此の横着の爺奴が、關所を通るには、皆夫々お届もすべき筈なるに咎められても知らぬ顔して居るとは、不届至極の曲物である、夫物共召取て縄うてッ……。』

との指圖に下役共、直さま取て伏んとするから助さん角さん兩人は、

兩人『是はしたり御老人を執へて何となさる。』

と云ながら、御老体の腕を取てゐる兩人の役人の、き丶腕執てグッと〆上た元より大力無雙の、助さん角さんに出逢ては堪らない

忽ちそこへ引くり反つて了つた、さあ之を見た關所の者は總立と相成、

役『汝れ關所の役人に向つて手向ひ致すとは、不屈至極の奴である。』

と兩人の者が、助さん角さんに打てかゝるを、角さんヒラリ体を變すと見へる間もなく、忽ち棒をガラリと打落した早業に番卒は其の場へバッタリぶつ倒れる、所が今一人の者が老公見掛て打てかゝりましたから助さんが之はしたりと、棒下をかい潛り『御免』と云つゝ左手を脾腹へ當ると、何かは以て堪りませう、其の場に

顚倒して了ふ、さあ役所の者は『夫つ狼籍者、搦め取れつ』と刺又或は袖搦を持て、一同が總立と相成ましたから、助さん角さんの兩名は、

兩人『之はしたり御役人方暫く御待下されい、吾々は決して狼籍致す者では御座ません。』

と云ども、役人は耳にもかけない、烈火の如く憤り『夫早く搦め取ぬか』との指圖ですから、此方からお待下されも何もあつたものでない、三名に向て打て掛り突て掛るから、助さん角さんの兩人も、其場に於て右に投げ左に打倒す、是を眺めた重役はこり

や是儘に捨置けぬと、

重『夫者共鐵砲以て打取つ。』

と下知の下より大勢の役人は、總掛りとなりて火繩に火を付け、玉込をなし、今や打放さんと致します故、如何に角さん助さん達人だからつて、鐵砲に掛ちや協いません、殊に御老体に怪我あらせられては一大事と、已を得ませんか

兩人『重役共、控え居れ、勿体なくも水戸の御老公であるぞ。』

と大聲に呼ばわりますから、驚ろいたのは重役共『何に水戸の御老公……之はしたり一同控へ居れつ』と、重役初一同の者は其場

に平伏致しまする、助さんと角さんは、

兩人『御老公、如何致しませう。』

と伺ひますと、御老公ニコ〳〵と御笑ひに相成り、

光『之重役共、靜かに致せ。』

との仰せに、關所の總頭たる寺田五左衛門、

五『はゝはつ。』

と平身低頭に及び、

五『吾々共、御老公とは存せず無禮の段は平に御許下され度、願上げ奉ります、就ましては只今の、無禮御詫仕ります故、

何卒後々の儀宜しく願上げ奉ります。』

と諸肌打抜ぎ、あはや腹掻切んと致します故、御老公は、

光『これ五左衛門とやら、暫らく待て、汝に申し聞事あり、過失は過失兎に角座敷へ通せ。』

と仰せられますから、五左衛門は腹を切にも切れず、只々恐れ入て其儘御供を致して参ります、そこで御老公は座敷へ御通りになりましたから、五左衛門は次の間に兩手を仕へ、

五『先程から部下の者無禮の段々、御詫申し上るも誠に恐れ多い事で御座います、何卒此儀は私一命を以て、事故なく御寛大

の御處置下されやうならば、有難き仕合せに存じ奉つる。』

と低頭平身に及びまするとと、御老公ニッコリ遊ばされ、

光『いや〳〵五左衛門、心配致すな只今の事は別段、其方共の過失と言わけでもない、原を質せば予が知らぬ振で通たから、起た事じや決して其方、割腹するには及ばぬ予も此の度は忍びの巡回故、別段咎は致さぬが、併し關所を設けてあるのは、諸人の通行ばかりを調べるが役ではない、關所と云はつまり往來人の中に、悪き者が居て通行人をいため、又はか弱き者が悪人共に苦しめられたとか、雜多の難義を致す者がある、そこで關

所が嚴重であると、通行人が恐れをなして惡き者は、此邊を通行致さぬ樣になる、然る時は自然とやす〳〵往來が出來る、是が關所を設けた元來の趣意であつて、無暗と通行人を嚴重に取調べるばかりが趣意ではない、善と惡との兩道をよく見分て、たやすく往來をさせるが關所の誠の趣意であるから、以後は成可良民と見れば、手數を掛ず懇切に通して遣る樣、關所が余り嚴しく過ると、夫が爲に或は關所の裏道を通り、却て關所の爲に往來人の難義を致す事がある、夫れ故爾後は必ず往來人の便利になる樣、調べて遣が宜いぞよ。」

と懇々と諭しに相成まするとと、五左衞門は『何を以て此御恩が報ぜられませう』と涙に暮て御老公のお諭しを喜こびました、光圀卿は最早是で用事はない、以後は十分氣を付よと仰せて別をお告になり。

フシ（助さん角さん引連れて、關所を後に旅まくら、數重なりて幾度か、お出でなされた所は、之ぞ名高い木曾川の、太田の渡場で御座います）

詞『すると向河岸から二三人の旅人を載せた、渡船が岸を離れようとする、此方には七八人の旅人が船待をして居ります中に、此

近在の者と見へます其中の太郎兵衛と云のが、

太『いや時に清兵衛さん、夜前の東村の庄屋茂左衛門さんところの騒動聞しやつたかいの。』

清『いや〳〵何にも聞ぬ何か混雑な事でもあつたかな。』

太『お前さま、えれいにも〳〵も大變な事があつた、昨夜何でも出羽の羽黒山の、山法師じやとて海眼とか鐵眼とか云山法師が男女打交十人連で其の中女は、三人で男は七人じやて皆強そうな髭面斗の奴が、庄屋へ遣て來て何うでも一夜の宿をしてくれと頼んだ相だ……。』

清『はあ……。』

太『所が茂左衛門さんは此頃病氣じやでの、御家内のお芳さんが出て、手前共ではお宿申し度は山々なれど、家中に病人が御座いますの故少々取込で居りますから、外々を御尋下さいまし、此より一里餘向ふに太田宿と云所には、宿屋も澤山あトますから何うぞ夫へお出を願度と言つしやつた相じや。』

清『ふんそりや尤の話じや。』

太『すると其の海眼と云奴が目をむき出して、何にい、御亭主が病氣、夫は幸ひ吾々は諸國を、廻國致す山法師なれば、御病人

は加持祈禱を致し、又惡さものは正して通るが役目、最早お宿は願申さん、其の代り御病人御全快の祈禱丈でも致しませう、ズン〳〵上り掛りますから、お芳さんは、あゝ若し御祈禱は誠に有難御座りますが、何分にも病人の方は只今熱にうなされて居りますから、こんな所へ御祈禱を願ましては、却て病人に障りますかも知れませんから、又々お願致すとして今日は、御祈禱の儀はお斷り申し上げますと、言しやつた相じや。』

清『うむ成程。』

太『そうすると次の山法師の鐵眼と云奴が、夫はお氣の毒な併し

今をも知れぬ御病人を、延して置ては却てお爲に相成ぬ、何はともあれ御祈禱申そうと、十人の者が家内の斷言にも拘らずドン〳〵と奥座敷へ通り、ブウ〳〵と貝を吹立て鉦を敲く、さあ夫がため丸で病人は責苦に逢様な苦しみで、何うか御祈禱だけは暫らく止て下されと、云ても山法師共は聞ばこそ、いやいや御祈禱は吾々共の役目じやと、ブウ〳〵ドン〳〵囃し立るから、之や堪らぬと番頭が、金子三兩紙に包みて夫へ持出し、之は聊なれど御祈禱料で御座います、最早今日は之にて御祈禱御止め下され、定めし主人も全快するで御座いませうと、言と彼

の山法師は、色を取て開いて見て、いや／＼吾々は御祈禱料を貰ふ爲ではない、全く御病人の御全快を祈る爲であつて、御布施などを戴くわけは無と、つき反した相じや、

『フウン中々喰へぬ奴じやな。』

そこで番頭が仕方なしに又二兩を足て、五兩包で差出と、中を改めて決して斯樣な御祈禱料は頂戴致さん。御祈禱料の儀は吾々仲間の規定にて、色々あれど先當御主人などの御祈禱をするには、少なくとも五十兩の御祈禱料が入るなれども、今吾々は賴まれて參つた譯でもなければ、善根の爲にする祈禱故

其御心配には及びません、何だか變な口振に、番頭さんもこりや飛だ奴じやと呆れ相じやが、此儘にして置ば主人の一命にも關る事故、御家内と相談の上金子五十兩包みて、私共はそんな定めのある事は存じませぬが、御坊達から只今承はりました通り五十兩納めますから、御祈禱は之にて御止め下されと、包を差出すと、一同の奴等は何だか可笑い樣子で、目と目を見合せて斯樣な御心配は、御無用で御座ると云中に、無茶者の荒海圓に若讃岐と云奴が、いや／＼御先達せつかく御親切に、出された祈禱料無にするは却て如何、夫より之から太田宿へ行き

宿を、求めて其上で當家の御主人の、平癒祈禱を致す方却てお爲になるであらうと、赤い舌をベロリと出して吐した相じや。』

清『憎い事をする奴じゃな、夫から何うした。』

太『すると先達の海眼が然らば左樣の事に致そうと、眞面目くさつて御家内と番頭さんに、種々御心配を相掛ましたこりやせつかくの、御放捨お返し申すは却て御無禮で御座るから、御祈禱料は納めまする、之から宿へ罷越し御平癒の御祈禱を、丁寧に致しますると吐した、そこで一同が苦笑ひして太田宿へ行て、宿を求た相じやが、ヱ、まあ何と憎い奴らでないか、丸で泥棒

と同じ仕業じや。』

清『本當にそうよ、話を聞てさへ擲つても遣たくなる、何と云ふ惡い奴だな。』

太『何でも今朝は出立すると云事じや、もう追付け此の渡場へ來るに違いない。』

清『何に其の山法師が爰へ來る。』

太『うむそうじや……。』

と云ふて居る内に、遙か向ふにブウ〜と貝の音が聞へる。

太『夫や清兵衛さん貝の音が聞へる。』

清『ほんに噂をすりや影とやら、あれ〳〵向ふへ山法師が來るわ〳〵。』

太『おゝあんな惡たれ山法師に、掛つちや大變ぢや早う向ふへ渡らぬと又引掛つては飛だ迷惑せねばならぬから。』

と先程からの話を、片邊に佇んでお聞になつたは御老公、兩人の者に向はせられ、

光『モシ、夫では其の山法師は、向ふへ來るのがそうかな。』

太『左樣、彼奴で御座います、昨夜庄屋樣を騷がした惡僧で御座いまする。』

光『フウン、左樣かな隨分ヒドイ事をする奴であるな。』

とお話をして居られる所へ、向ふから來た船が着たから、向ふの人は上つて了ふ、此方に待て居た者は夫々船に乘て、向ふの岸へ着と皆せつ〳〵と上つて用事のある方へ往て了ふたが、御老公は何か思召があつてか、船舷に腰かけてお在になりますから船頭が

船『いや若し御隱居さんに、お若い方あれあの樣に向ふから山法師が呼んで居りますから、早く上つて下さらんか、あの山法師達は無法な奴で、少しの間違があつても直に、擲り殺す樣な奴じやと申しますから、私も擲り殺さしでもすると大變だから、

何うぞ上つて下さいませ。』

と云に御老公はニコ〳〵お笑ひになり、

光『いや〳〵心配するには及ばぬ。』

と緩々、煙草を喫で居られますから、船頭は氣が氣でない、どうぞ〳〵と騒ぎますから、

光『夫じや、お前が困るだらう、ボツ〳〵上つて遣ふ。』

と悠々、船からお上りになると船頭は、直様取て返して向ふの岸へ着けました、此方は御老公、

光『扨て助三郎に角之亟や、今渡場で聞た話が本當とすれば、往

來を暴れ廻る惡黨と言ねばならぬ、こりや此儘に捨て置れぬ、何でも取て押へねばならぬ。』

兩人『御意に御座ります。』

光『あの山法師は此の渡場を渡つて、どちらへ行くかな、私の考へでは多分此の往來を加納の方へ往に違ひない、此より加納へ往まで八里が間、松並木ばかりの往還で人家は、一軒も無い所と聞いて居る此の間で取押へねば相成ぬ、若し他道へ行てはならぬから、彼等が後になり先になりして加納近くまで伴て行き加納近くで引捕へ大久保加賀守へ、引渡しきつと成敗致さにや

成ぬから、其の積でな。』

と仰せられますと、助さん角さんの兩人は、

兩人『いや之は一段と、面白い事で御座りまする、是まで武士を對手に致した事は

手に致した事は度々御座いますが、山法師を對手に致した事は

まだ御座いませんから、一寸目先が變つて居て面白ふ御座いま

す、何でも其の山法師の突いて居る、杖を取上げて片端から敲

きのめして遣らなけりやなりません。』

ともう力味かへつて喜こびますから、老公は、

光『あゝこれ〳〵そうお前達の樣に喜こんで、彼の山法師を無茶

苦茶に殺して了つてはいかぬ、彼の樣な奴は嚴しく吟味致さね

ば相成ぬから、殺さぬ樣に旨く生捕にして呉れや。』

と仰せになると、兩人は、

兩『委細畏まりました。』

と何の事はない、十人連からの山法師を鼠か何ぞの樣に心得て掛

るとは、大した者で御座います、そこで御老公と助さん角さんと

は、ブラ〳〵とお出になると、此方は山法師共昨宵は旨い儲けを

したなと、喜びながら今此の渡場を渡つて御老公の後をズン〳〵

追付て參りますから、胸に一物御老公は、わざ〳〵道草を食て御

出になり、もうかれ是一里ばかりも御出に相成とき、漸々に彼の山法師共が追付いて來ましたから、御老公は何でも此方から一つ喧嘩を吹き掛て遣れと思召て、先達と思しき者に向はれ、

光『モシ〳〵そこな山法師のお方、貴方がたは何方の御修行者で御座るかな。』

と言れますと、先達の海眼ゲロリ一覗みして、

海『はあ、私共は出羽羽黒山の山法師でござつて、私は海眼と申し同行十人連にて、諸國を修行致す者で御座ります。』

光『左樣で御座いますか、夫は〳〵御殊勝な事じや、して是から

どちらの方へ御越のつもりかな。』

海『はあ吾々は是より京都の方へ、參らうと思ふて居りますので……。』

光『左樣で御座いますか、私しもやはり奥州路の者で御座つて、天神林の光右衛門と申す、隱居の身分じやが、せめてもの老の樂しみに諸國を見物して歩こうと、思ひ立ち若い者兩人を連て遣て來ましたが私も矢張京都の方へ、往き度と思ふたに是はよい道伴じや、どうぞ御供さして戴きたいものじや。』

と言れて、山法師共ック〳〵と御老公の樣子を見ると、

フシ（流石は天下の副將軍で御座いました御方、自然と備はる御人徳で、天神林の光右衛門と仰せは、立派な豪家の御隱居に見へます、付從がふ助さん角さんも、武術で鍛へた身体故、目の張こそは違いますが、風体が變て有ますから、是も大家の番頭の様に見へまする）

詞『其處で十人の山法師共、互に目配せ致しまして口には言ねど心の中で『はあ、此の隱居め大分金持らしいな、斯奴は何でも此の松原で遣付けて仕舞はふ』と言顔付を致して居ります、何の事はない兩方で遣付けごつこで御座います、此方は御老公ちやんと

先の様子を見て取て了ひニコ〳〵お笑ひに相成り、是も心の中で『はゝあ、此山法師共め、いよ〳〵盗賊じやな、もう我々の懐中を狙つて居るな、よし〳〵今に取つかまいて遣るから』と、思召しながら、

光『いや時に先達さん、こうやつてお伴を願へば、夫までゝ御座るが今貴方が衝て居る其の杖は何んと云ふ杖で御座るかな。』

海『はあ、之は御老人、お前様達は知らぬ事で、外の修業者が衝て居るのはありや錫杖と云ふが、山法師が衝て居るのは『こりや』金剛杖と云ふて、詰り善人じやとか、或いは奇篤な人と

かには八百神を祚禱すると云ので、是此の通り八角に削り上てある、又其のうちで惡人原は此の金剛杖で打のばすと云事に成て居る夫で是此様に八角の所を八幡地獄杖とも云ふのである。』

とさも、知つたか風に鼻蠢めかして物語る御老公はジッと御聞になつて居たが、

光『成程な左様で御座るか、夫では若し山法師の中に惡人があれば、其棒にて矢張お殺しになるか。』

海『そりやもう、御老人此山法師には夫々の規則のある事で、極く惡い罪を犯した者は殺しもしますが。』

と脛に疵ありや高足と身に罪惡を犯せし山法師共、何だか薄氣味惡くて仕様がない、互にいやな顔付して居りましたが元來七人共に腕前勝れし荒法師の事なり、又三人の女とても男にも勝る腕前の者ですから何でも此の老人の懷中をせしめて遣らうと、各々目配せ致して居りますのを、御老公はちやんと御心づきになつて居るから、相變らず先達を相手にボッ〳〵話ながら、後になり先になつてお歩きになつて、かれ是れ道の程三里ばかりも來ますと、先達の海眼です、此の邊は松原續きの中程なり幸あたりに人通りはなし、仕事をするには屈强の場所と一同に目で知らしますと、

此方は助さんに角さん少しの油斷も致しません、御老公の左右に附添ふて力瘤を入て居ります。

海『あゝ時に御老人、此處らで一服遣りませうか。』

光『左様か、大分疲れて來たから一服やりませう。』

と云ひながら、先達の海眼が松の根方に腰掛たから、御老体もお掛に相成まして、色々種々の話をなされます。すると後の方から無茶者の荒海圓と云ふ奴が、異様に眼を光らして御老公の後へ廻りましたから、助さん角さんは『こりや怪しいぞ、いよ〳〵仕事に掛るかな』と、目を附て居りますると又ぞろ、無茶者の若讃岐

と云奴が御老公の傍へ出ますから、兩人はこいつ愈怪しいぞ、來たら最後目に物見せて遣ぞと御老公のお傍を離れず、守護致して居りますると荒海圓に若讃岐の兩人め、今目の當り甚い目に逢ふとは、お安い山法師夢にも知りませんから、海圓は腕を延してグッと助さんの腕首を捕えた、すると又若讃岐は角さんの腕首を捕える、氣早な角さん、

角『之はしたり、何をなさる。』

と云より早く捕れた手を、パッと放して彼の若讃岐の腕をグッと逆に捻ぢ上げた早業、痛いと云間もあらばこそ直に足を上て、脾

腹を一つウンと蹴放した急所を遣れて、若讃岐ウンと引くり反つて倒れて了つた。夫と同時に此方の海圓も、中々の荒法師ですが助さんに掛ちやあ、驚に小雀で御座います、ポンと投付られて其の場に氣絶して了つた。すると是を眺めた殘りの奴共『これは怪からぬ同業者に對して何にをなさるか、覺悟をしろ』と今目の前の手並にも、懲ず一同立上りて金剛杖を振上て、滅多無性に打て掛ります故、助さん角さんの兩人はニッコと笑つて『ふむ、此の泥棒山法師め、何をぬかすか猪口才なりサア來い來れ』と御老公を後に致し、彼方此方に身を變し棒をふんだくつては、投げ倒

し蹴倒す、御老公は松の根方に立つて兩人の働きを見物しながら

光『これ兩人や、餘り手ひどくして殺して了ふなよ、殺してはいけないよ。』

と仰せになります、兩人は承りましたと、倒れては起き、起きれば投られる奴共を對手に、しきりと働いて居りますると、お話變つて、

フシ、以前の太田の渡場へ、差して來ました一人の男、深編笠を眞深にかぶり、大刀凛々しく挾みまして、黑羽二重の紋付に、ぶつさけ羽織を着用し、切緒の草鞋に身を固め、見るも勇まし

一人の武士）

詞『船頭に向ひ、

武『あゝこれ〳〵渡守や。』

船『はい。』

武『今朝六十余の御隱居に、三十二三の番頭体の男が兩人附添て三人連にて、此の渡場を渡りはせなかつたか。』

船『サウ〳〵渡りましたとも三人連で、其の御隱居が何だかグヅ〳〵して上りませんでしたが、其すぐ後から日本を廻國する、

惡山法師共が蹤て參りましたから、定めし今頃は三人の方々が難儀いたして居る事で御座いませう。』

武『何に……惡山法師が御を蹤て參つた。』

船『はい、加納の方へ行きましたから、多分御隱居と同じ道だと思ひますが。』

武『フウン左樣か、然らば今頃何の位まで參つたであらうかな。』

船『サウ、彼の御老人の足の事で御座いますから余り遠くは行れますまい夫でもかれこれ三里余は往れて御座らう、何しろ長い松原續きでイヤになる街道で御座いますから、休み〳〵往れた

らまあそんな者で御座いませう。』

武『うむそんなら是から急いだら追付る事であらう急いで向ふへ渡して呉れよ。』

と言ひながら、渡守に酒手をくれてやりますから渡守は、

船『これは旦那、有難う御座います。』

と喜こんだ、

船『エ、、旦那様、今のお方方をお知り合なら、早く追付てお助けなされませ、何分にも其の山法師共は十人連で御座いますから、いづれも腕の強そうな、悪黨ばかりヒョッとすると、ドン

な御怪我がないとも言ませんから成可お早く御出なされませ。』

と酒手を貰つた船頭は、追従タラ〳〵言ひながら櫓を握つて、船を出しまするとと程なく向ふの岸に着きました、すると彼の武士は

武『お、船頭、御苦勞であつた。』

とヒラリと岸へ飛び上り、トツ〳〵と足を早めて一生懸命御老公の後を追て出て參りました。

フシ（やがてかれこれ道の程、三里余も來ますると、遙か向ふで折も折、時も時なり今助さんと角さんの兩名が、御老公を後に庇護ひながら、十人連の惡山法師を對手に致して、彼方へ投げ

遣り此方へ蹴飛し起る奴を投げ出し、掛る奴をひつぱづし大働らきに働き居る所で御座います、彼の武士は是を打ち眺めつゝお、此は丁度宜い所へ出て來た、助さん角さんさぞ骨が折れる事であらう、山法師共を對手にするは、少々不足だけれど、是も又一興と云ふものなり、いで助けずば相成ぬと、其の場を目がけて、飛込で參り加勢を致そうと云ふ、此の武士こそ別人ならず、水戸の御老公の後を、慕ふて參りました所の、彼の有名なる關根彌次郎さんで御座いまする。さあ此の場の始末が、如何相成りまするか是から追々お話は面白く相成りますが、余

餘り長いは衛生の御毒、こゝらで一寸御免を蒙りませう)

◉梁川庄八

フシ(散りて香りて敷島の、花は櫻木人は武士、武士に鰹節、浪花節、其種々のある中で、世にも優れた大和武士、武士の鑑と仰がれて、後の世迄も名の高き、英傑梁川庄八が、義理に勇んで勇ましく、大阪入場の一條り)

詞『快傑と呼ばれし梁川庄八光政のお話は細かに申せば山鳥の尾のしだり尾の長々しうは御座いますが、ざつと申すと、父の庄八

光宗が伊達政宗公に仕へて、食祿二千石を頂戴して居りましたが同僚の藻庭、戸川、角目等が讒言の爲に無念ながらも切腹致して相果る、其處で梁川庄八は父の遺恨の奴原を、片端から討取て國表を立退と、其又殺された奴原の悴供が、親の仇と庄八を附覗ふが、何しても討事が出來ない、そこで仙臺の智者と呼ばれた、齊藤外記が奥州仙臺には、梁川庄八より外に強い者はないと他家から、思はるゝのも殘念の至であると其身は熊の油賣と化け込で、漸々庄八を連れ歸り、双方丸く納めた、夫から庄八は浪人して遂に大阪へ入城なし、討死すると云段取になるので御座います。

フシ(秀頼公の御爲に、我も々々と馳せ來る、諸國の武士は十萬騎、花の浪華の賑かさ)

詞『頃は慶長十九年二月の末つかた、大阪城を三里餘り距てた所に、守口の宿が御座りまする、其守口から十五六丁離れたる堤防の松並木の所に、一匹の牛が繋いであります、其傍を通り掛りましたのは、深編笠を被つて身には黒木綿の擯榔子色になつた、紋付を着まして、大小の柄はボロ〳〵になつて、鞘は所々まだらに剝たる者を帶しまして、年の頃は四十七八歳にもなりませうか大兵肥滿の浪人身裝は誠に尾羽打枯した有樣だが、どことなく應

揚な所が御座います、謂る武士は喰ねど高揚枝とやら、丸く太つた肩をそびやかし、口の中で何やら詩を吟じながら、高い山は高し低い山は低い……兄貴己より年や上……まさかこんな詩でも無でせうか、ぶらり〳〵と牛の傍まで遣て來て獨言。

涙『あゝべイや、わりや堤の上で色々の草を、喰ながら方々を見物して居るは、うむ嘸面白い事であらうな、ドレ〳〵今御馳走遣るぞ。』

と、そこへらの草花手折て與へますと、牛は何も有難うとも何共いはず、さも嬉しさうに尾を掉り頭を振て、ムシャリ〳〵と食て

居ます、大きい圖体をして居るが誠に可愛ものので御座います、彼浪人は牛に草を遣て置て、五六間離れた松の根方に腰うち掛て、余念もなう此方彼方と眺め居りますのは、餘人では御座いません梁川庄八光政其人で御座います、其内に向ふの方から八人連の侍が、いづれも立派なる衣服を着て居りますが、太分飲過たと見え彼方へ寄たり此方へ寄たり全く八人連で、飄々浪々として高話を致し、ヒョッコリ〳〵遣て參りましたが、其連中での暴れ者と名を打つたる松井大之進と云男が、今酔眼を見張て見ると向ふの松の根方に、身姿卑しき一人の浪人体の者が居るから、止せば宜い

のに一杯機げんで、多勢を頼む猪武者。

大『何と各々方、向にボロ〳〵の武士が腰掛て居る、酔冷の樂めに如何で御座る一つ嬲て遣ふじや御座らぬか。』

と、云と何れも猪の御仲間連中だから堪らない、忽ち賛成して

○『いや松井氏、夫は近頃面白い此頃は思ふ様な喧嘩も出來ず、腕が鳴る久方振じや一番嬲つて遣らう。』

△『そりや面白い〳〵やあい遣れ〳〵。』

忽ち衆議一決した、中にも石川半之亟と云ふ男

半『先づ最初の皮切は身共が致さう、若し相手が默つて居たら、

松井氏なり各々方に頼む。』

殘りの七人は宜し心得たと、そこで先づ石川が梁川先生の前を通り越す折、わざと刀の鞘で深編笠にドウと當て、其儘通り過ましたが、梁川先生己れ無禮千萬と、怒心頭に發したが、そこは先生躰と共に度量は廣い、ふむあいつ等先程から何事か語らい居た様子扨は一杯機げんで喧嘩を吹掛に來たなと思ひましたから、あんな蛆虫同様武士は風上にも置ない奴小人輩を對手に致すも大人氣ない、さわらぬ神に祟りなしと、一寸と深編笠の歪んだのを直して知らぬ顔の半兵衛で空嘯いて濟して居る、喧嘩賣もこんな買手に

出逢ちや堪らない、其替り一朝怒られた日にやあひどい目に逢されます、此方は生醉共で御座います、ふむ先で對手にならぬは大方多勢を恐れての事ならん、腰拔武士奴、今に目に物見せて呉んずと、上見ぬ鷹の付上り此度は吉川忠助と云が、又通り掛りにコツンと笠に鞘を當たが、梁川先生は無言で濟して居られます、是じや拍子拔がして喧嘩にもならぬ、今度は高畑采女に奥原武一郎の兩人、シコを踏み鳴しながら通り越す途端に、ドット鞘を肩口へ當た、梁川先生は無言で濟して居られます、喧嘩賣も是では辛棒が出來ぬ、今度は平井主水岡田熊太郎と云兩人が、通り掛りに

胴腹へ當た、梁川先生は無言で濟して居られます、あとに殘つた渡邊五六阪田左内と云兩人は、癇癪を起して今度は前を通りしなに、足を蹴飛した、蹴飛されては堪らんから、ヒョイと足を除たら兩人の奴等、ヒョロ〳〵と蹌踉て二三歩先でやをら踏止まり、後を振向くのと梁川先生のヒョイと顔を上げると、ヒョクリ顔が見合た、無禮にも程がある人を土足に掛けるとは何事だ、とムツと致したが、如何なるのかこゝらで一寸御免を蒙りませう。

浪花節三傑集 終

274
331

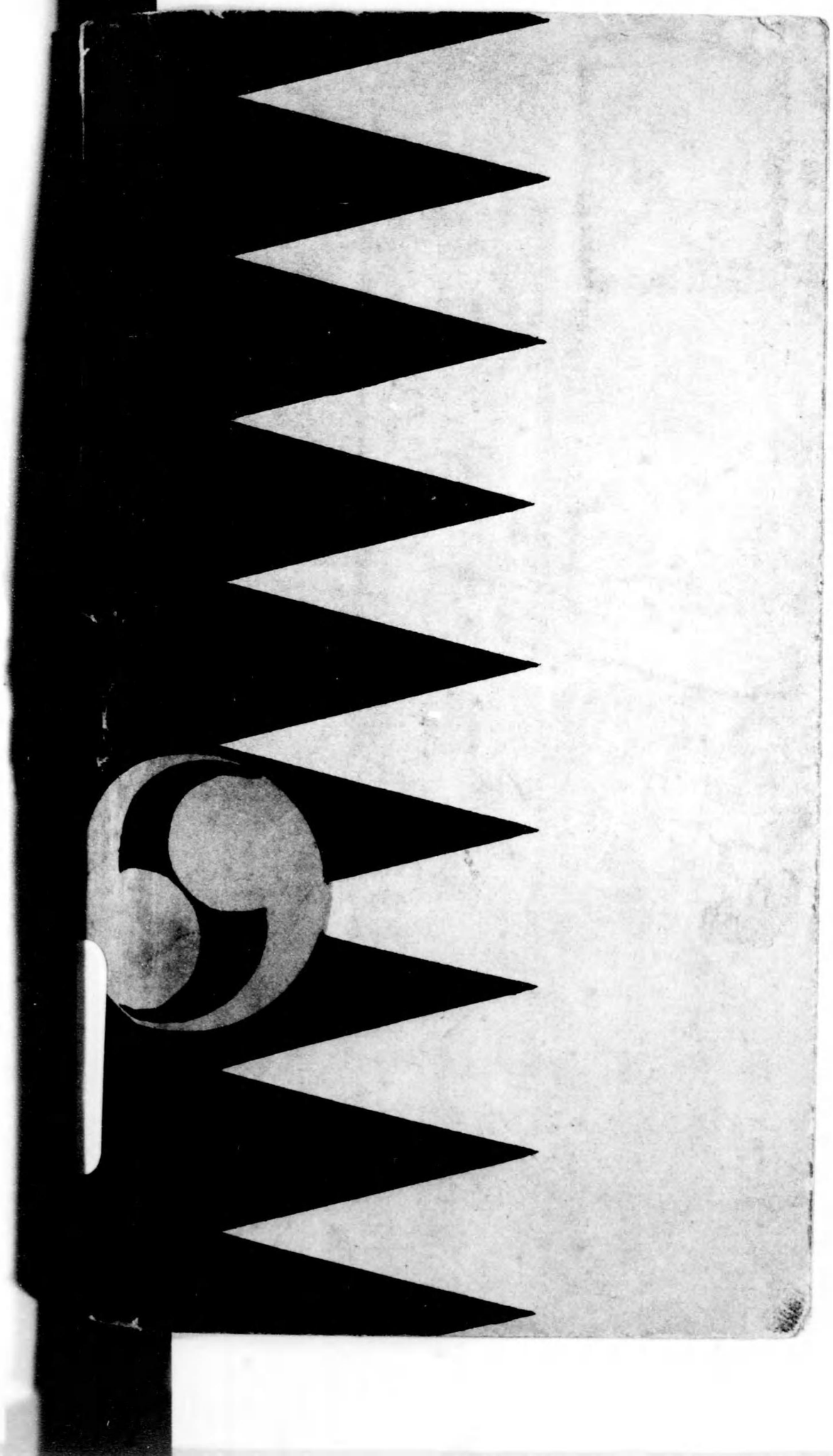
大正二年八月二日印刷
大正二年八月五日發行

東京市下谷區二長町五十番地
編輯兼發行者　東生武雄

東京市日本橋區若松町廿一番地
刷刷者　井出五三九

東京市日本橋區若松町廿一番地
印刷所　日進社

不許複製

發行所　東京市下谷區二長町五十番地
萬卷堂書店

終